

# 香葉

記念号



1981

NO.10

## 目 次

グラビア	1
短大初期と香葉会の歩み	2
短大同窓会誕生の頃	4
短大設立三十周年を迎えるにあたり	5
昭和二十年代の女専・短大	6
昭和三十年代の回想	7
思ひ出す事	8
昭和五十年代の短大	9
座談会	10
覚え書(十)——女専・短大小史	15
「回想」	18
香報室	22
コーヨー・スポットライト	27
「お店訪問」——おじゃまします	31
「展望」	33
「こんにちわ」	37
同期会・クラス会報告	40
母校ニュース	43
五十五年度総会報告	45
合同同窓会報告	45
賛助金をご寄付下さった方へのお礼とお願い	47
編集後記	48

表紙……………関 頼 武

カット……………青木千恵子(短英27年度)・木村  
恵子(短幼52年度)・中石みどり(短幼51年度)

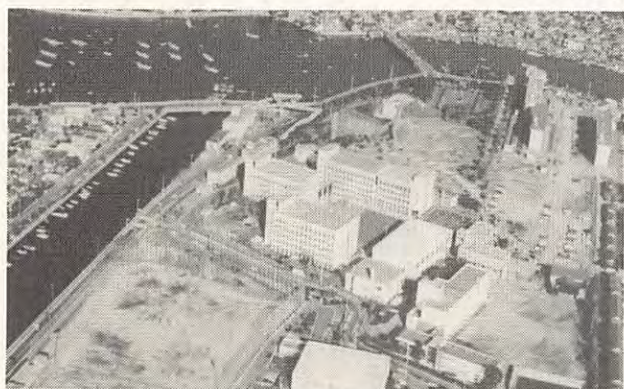




旧短大（昭和43年頃）



3号館（昭和48年頃）



短大全景 昭和55年（秋）

## 短大初期と香葉会の歩み

古城 房子



今年短大が設立されて三十年、香葉会が十年目を迎えた記念すべき年であります。わずか四十余名の一期生から始まった短大が、在学千三百名を越す大世帯に成長し、立派な校舎と設備を整えた学園に発展した

ことは、卒業生として誠に大きな喜びと誇りを覚え、心からお祝いを申し上げます。この三十年間に卒業生も一万を数える程になりました。同窓会が大学同窓会の燦葉会短大支部として活動を始めてから二十年、燦葉会から独立して香葉会として三千名の卒業生と共に歩み始めて十年になりました。多くの会員の方々と、諸先生方、学校職員の皆様に助けられて、ここ迄一步一步進んで来られたことに深く感謝申し上げます。

昭和二十一年、それ迄男子校であった関東学院に始めて女子の爲の専門学校が併設され、学制改革でそれが短大に変身したのが二十五年のことでした。当時の横浜は空襲で焼野原になった跡を未だ留めてはいましたが、札幌から出て来た私を充分刺激する程活気がありました。街の主要な所は全部米軍の基地で占領軍の兵士が街中にあふれていました。そんな環境の中で始まった私の学生生活でしたが、学ぶということがこんなにも楽しいものかと思う程毎日が充実していました。専攻に一番得意な英語を選んでしまったのは他にやりた

いものがみつからなかったからですが、簡単な面接で入れて戴けたのは志願者が少なかつた当時の特権でした。何しろ二年間で教職につける位、この不出来な学生を仕込まなければならぬ先生方も大変です。その熱意と懇切丁寧な授業で英文法の一から教えて戴いて、その年のスピーチコンテストで一位を戴いた時は先生もびっくりだったでしょう。英語教授法の恰好の教材に登場する羽目になりました。短大の教え方の如何に優れていたかを示す良い例です。後年、某大学の三年に編入学した時、学生の学力に著しい差があるのを知って、改めてこの短大で学んだ有難さを痛感しました。学内の年間行事は実に盛り沢山あつて楽しいものでした。ミセスタッピングは授業では厳しい先生でしたが、よくお宅に招いて下さつてお茶をご馳走になり料理を教えて戴きました。そこで見た事もないような大きなハムを惜し気もなくブツ切りにしてマッシュポテトにまぜ、オーブンで焼くのを見て溜息が出ました。彼女はレクリエーションクラブを指導していて始んどの学生はここでフォークダンスを習ひ、英語のフォークソング、キャンブソングを覚えゲームを楽しみました。アメリカンスクールとの交歓会もあり、授業の見学もしました。授業中、生徒は出たり入ったり、机を引きずつて移動したり、おしやべりをしたり、足を机に乗せんばかりの行儀の悪さに驚いたものですが、ティーパーティーでの彼らの物腰の優雅さにも又、驚かされました。又、スタンツ大会というのがあり、各級毎、先生方も趣向をこらして如何に皆を笑わせるか苦心したものです。今、学院名物のシェークスピア劇は女専時代から始まったもので、光畑先生の厳しい発音指導、兵藤先生の演出で、しこかれました。女性ばかりでやるのですから宝塚ばりの名優も出ました。衣装は、カーテンの布

や残り布をかき集めて、智恵をしばって手造りです。二十七年頃から俳優座へ行って借りてくるようになりまし。体育の授業は私達の一番気に入った一つでフォークダンスや社交ダンスを習いました。門根先生の、一・二・三のかけ声に合わせてワルツやタンゴのステップを踏み、ついでに相棒の足も踏み、それでも何とカリズムに乗れるようになった嬉しさ、これは卒業パーティーや、後の燦葉会との合同クリスマスパーティーの時に、大いに役に立ちました。スポーツ大会も盛んでした。主にバレーボールでしたが、先生方との対抗試合は現在も引き継がれているようですね。現院長の柳生先生もアメリカ帰りのピッカピカの独身青年、小滝先生もホヤホヤの新妻、兵藤先生も学生の前で足がふるえた純情さ、とにかく若い先生方が多くて学生数が少ないのですから誠に家庭的な雰囲気、その中で相川先生が家長としての尊厳を守り、検垣先生が慈母の役をつとめ、脱線しないようレールの役をつとめて下さったのが上市事務長だったのではないのでしょうか。とにかくあれから三十年たった今でも、懐かしく思い出される学生生活です。卒業後数年たった頃、当時の学長相川先生から同窓会設立のおすめがありました。短大卒業生は燦葉会員にされていたのですが、総会への案内もなく、活動は皆無だったのです。早速燦葉会長の加藤氏とお逢いして、話し合いの結果、短大支部という形で活動することを認めて戴き、女専と合同で第一回発起人会を開いたのが三十四年の事です。支部創立迄は、何度も会合をもって、第一回の支部長に田中実子氏（女専三回卒、当時捜真女子高教師、青山短大講師リーディ実子氏）を選出、いよいよ活動が始まりました。当時はなるべく多くの方に同窓会のあり方を知っていただく為に、委員の任期を一年とし、皆で交替で支部長、

書記、会計を引き受けました。総会、クリスマス会、新年会の他、毎月三日に講師を招いて開かれる三日会、東京で開かれる東燦会等、燦葉会との合同の行事にも参加を呼びかけました。卒業生の人数が少なかったからやれたようなもので燦葉会事務局にずい分お世話になりました。卒業生三千人を越した四十五年には、独立を認めて戴き、いよいよ一人歩きを始める事になりました。先ず会則作成、会誌の発行、総会の準備通知等、庶務課や、学内卒業生の皆さんに手伝って戴きながら、度々学校に足を運んで全部自分達でやらなければならず、その数年間が一番苦しい時期でした。年間の予算に少し余裕が出来たのを期に、専任の事務職員を会員の森下さん（三十五年卒）続いて伊藤さん（五十二年卒）が引き受けて下さり、五十五年発行の名簿はお二人の努力を元に出来たものです。しかし、パートの事務処理では間に合わない程、会員数が増え、学校側と検討の結果、庶務課の一部門として取扱って戴くという現在の運営方法になりました。最初から手伝わせて戴いて参りましたが、会の成長を思うと感慨無量です。学校当局と皆様のご協力があつたればこそと、心から感謝し、これからの発展を祈るものです。



## 短大同窓会誕生の頃

加藤 亮 三



第十号を発刊されるという意義ある年である。

この機会に同窓会発足当初の状況について想い出の一端を述べる  
こととする。

昭和三十四年頃女専の卒業生（三期生まで）と短大の卒業生との間に女専、短大独自の同窓会をつくりたいとの声が出てきたので、当時の学長、相川高秋先生のご意向もあつて、その頃燦葉会（高等部から大学卒業生を母体とする同窓会）の会長であつた私が、女専英一回卒の安沢みね氏と短大英一回卒の古城房子氏に個別にお目にかかり、両者が代表するご意見を聞きながら、ご希望の線でまとめべく協議を重ねた。その結果自分の間燦葉会の短大支部として結成して頂くことに了解があつたのである。勿論燦葉会としても異議なく、これを歓迎し、諸行事には積極的に参加して頂いたので、私も女専、短大の多くの卒業生と真の同窓としておつき合いができたことは有難き幸せと思つている次第である。

その頃学院関係の同窓会としては、中学関東学院から始まつた三

春台の中高校の卒業生をもつて組織する橄欖会と、前記の燦葉会と、六浦中高校卒業生による六葉会とがあつた。夫々直接的に出身母校との連携が主となつていたので、当時創立者であり学院長であつた故坂田祐先生のご要望もあり、我々としても学院が短大発展しつづける状況に添つて、これら各同窓会が、横の連携を密にして学院の大きな外郭団体としてまとまる必要があると考えた。そして、各会の幹部が協議した結果、各会は夫々歴史もあり構成母体に若干の相違もあることから、おのおの独自の運営をしながら各会長、幹事若干名をもつて関東学院（合同）同窓会の名称の下に団結し、母校学院に対し意思疎通を図る機関を設けたのである。それは昭和四十一年五月のことであつた。因に四十三年の夏、大学の学園紛争勃発に伴つて学院の寄付行為が改正されたのであるが、その新条項に基づいて同窓会から参加する学校法人評議員十名とその内から理事、監事各一名の選出もこの機関でスムーズに行うことができたのである。

このように合同同窓会の発足もあり、一方短大支部の会員数も昭和四十五年には三千名を越す大世帯となつた。充分自主運営の実力があつたこともあつて、同年に香葉会として独立し合同同窓会の一単位として他の会と併列になつたのである。爾來十年の月日が流れているが、短大の発展と共に拡大強化されつつあることは洵に慶賀に堪えません。

それにつけても、会の発足当初から今日まで盡力されておられる古城会長を中心に、役員各位のお骨折により今日の充実した姿があることを思い感謝している次第である。

## 短大設立三十周年を迎えるにあたり

林 淳 三



関東学院女子短期大学は今年度、短大設立三十周年を迎えた。これを関東学院の歴史上から見ると、短大の前身の女子専門学校創設は、長らく男子中心の学園として存在した学院が、女子教育に踏み込み、総合学園化に飛躍したと言える。

しかし、短大三十年のうち、前半の十五年は経営的にも教学的にも関東学院大学に依存していた傾向があり、必ずしも完全な女子教育が行われていたとは言えない。むしろ経済学部・工学部・神学部と言う、比較的女子学生の少ない学部構成の大学に、短大の女子の存在は共学的雰囲気をつくることに貢献したと言えることができる。このことは短大が三春台から六浦移転を希望し、大学もこれを歓迎したことからも明らかである。こうしたことは本学が、大学としての性格を形成することや、学院教育の一体化などの効果をもたらしたが、他方、本学にとっては女子教育の本質が失われがちであったことも否定することはできない。

それが短大三十年における後半、すなわち昭和四十年代に入ると、名称も女子短期大学に改正され、女子短大としての教育作りがなされた。女子に適した教育課程が設置され、新しく設けられる校舎設備も女子にふさわしく造られた。このことは関東学院大学の文

学部設置に伴う女子学生の増加と大学紛争が、短大の独立制を認める機会になり、更に短大校舎の移転、女子職業教育の導入および短大校長の公選制などが幸いした。そして現在では室の木校地に本学がすばらしい女子学園として生まれることになった。

こうした本学発展の年月は、多くの先輩教職員の本学を支えてきた非常な努力と、不完全な教育環境にも耐えて勉学された当時の学生、すなわち卒業生諸姉の歴史でもある。特に設立以来、関東学院の建学理想に共鳴して勤められていた教職員の方々は、昭和二十年代、三十年代の私学経営難時代において、公私にわたるご苦労は、同じ時代に他の私学にいた私も十分理解するところである。その上、大学構内に校舎があり、設備その他、大学に依存傾向であったことは、大学に対する配慮にご苦労があったことと思われる。同様なことは当時の学生の方々の中にも味わわれたかも知れない。いずれにしても今日の輝かしい本学の姿は先輩諸兄姉のご苦心、ご努力の集積であることに 변りない。

本学はこの十年来、全国有数の短大になったが、急成長のため、設備および諸制度になお不備なところがある。そこで今後も教育内容の充実はもとより、機構を整備し、図書館・礼拝堂をはじめ、学生の課外活動ならびに厚生施設を漸次整え、ますます立派な短大になるよう努力するつもりである。

短大設立三十周年にあたり、卒業生諸姉の今までのご援助に感謝するとともに、今後のご協力をお願いする次第である。

※昭和五十五年は、香葉会発足から十年、また短大設立三十周年にもあたりましたので、林学長には、特に三十周年について書いていただきました。

この欄では、年代順に歴史を追い、皆様にも回想していただきましょう。編集委員の独断で、昭和二十年代を名誉教授・相川高秋先生、三十年代を国文科非常勤講師・兵藤正之助先生、四十年代を幼児教育科名義専任・安藤寿々代先生、五十年代を家政科長・山口和子先生に、それぞれのお立場から、思い出を含めてご執筆をお願いいたしました。

## 昭和二十年代の女専・短大

### 相川 高秋



終戦直後、理事長  
坂田祐、校長相川高  
秋という責任者で申  
請した関東学院女子  
専門学校が認可に  
なったのは、その翌

年、昭和二十一年一月の事だった。凡て灰燼に帰した後の事なので、色々と準備に時間がかり、入学試験がどうやら出来たのが五月二十四、五日の両日であった。志願者約二

百名、その内で入学許可されたのは、英文科七十七名、家政科六十名であったが、経営上の考慮から、(文部省の承認なしで)無資格の子科という級を作り、そこに二十四人の人を不合格者の中から選んで入学させた。開校準備当時のほんとの専任教員は、相川、時田、検垣の三人だけで、あとはボランティアで手伝ってくれた教員候補者達であった。尤も米国の宣教師諸氏、特にタッピング夫妻、フート夫人等が相ついで援助に駆けつけて下さった事は言う迄もない。

開校と殆んど同時に、女子教養講座というものもを設け、毎月一回、日曜の午後を市民のために開放して、本校の先生三分の二、外来講師三分の一で、文学、社会、経済、歴史、宗教等の講義(有料)を催したことを、今でも誇りと思っている。この伝統は今後も守って、地域社会のために奉仕しなくてはならぬと考えるからである。

その年には学校祭をやって、演劇、音楽等で大いに氣勢をあげたが、それは新憲法の発布の年でもあったので、日本中が新しい希望にあふれていたからでもある。三春タイムズが出たのもこの年である。(後の英文 *Kanto Times*)

翌二十二年末迄には、上述の三人の他、荒木、川端、横沢、鈴木、安藤、光畑、柴、小滝等の錚々たる教員メンバーも揃って、わが女専は、押しも押されぬ有力校の一つとなっていた。場所は勿論三春台。(六浦移転は、昭和二十八、二十九年である。)

忘れる事の出来ぬのは食糧難と寒さであった、固形食糧が手に入らぬためお弁当が持参出来ず、授業は正午で切り棄てねばならなかったし、冬はガラスのない窓から雪が降り込んで来て、オーバーを着たままの学生の座った机が白くなる事もあった。こんな状態が一年以上続いたのである。

図書室の本も、始めは学生達、教員、校友の持ち寄りであった。その図書室に泥棒が入って、ゲート全集等をごっそり盗まれたのもその頃である。

併し学校は一つの家族のよう、学生達も加わって経営の相談をした。学校行事は勿論学生達の発想に依るものが多かった。そんな訳で、教員、学生合同の旅行(後にリトリートと言われるようになった)は、始めから我が校の名物であり、その案は一年を通じて念入りに練られたのである。

短大制に変わったのは、昭和二十五年である。



現院長の柳生先生が短大に就任されたのは、短大になって三年目の二月であるが、柳生先生がその後責任をもって続けられたシエイクスピア劇は、昭和二十三年、故光畑先生指導の下に行われた「ヴェニスの人」を始めとするのであるが、当時の学生の中には、今ではもうお孫さんのある人もいる。時の流れは早いものである。

## 昭和三十年代の回想

兵藤 正之助



昭和三十年代の短大について書けといわれても、何がいつあったことや、どうも余りうまく思い出せそうもない。そこで、まず現在の四号館まで出来上った短大の庭でも散歩しながら、ぼつぼつ思い出すことを記すことにしようか。

何ともまあ、「女の園」、「女の学びや」と呼ばれるにふさわしい学校になったことぞと、今の短大館のあたりを見まわして感嘆するのは、おそらくぼくばかりじゃあるまい。静か

で、青々とした芝生をかこんで、現代感覚の建物が四つ建っている、それが昭和五十年代のわが短大だからだ。

試みに今度できたばかりの四号館、東端南入口からなかに入ってみよう。そこには、朝十時すぎころから、坐りこんで、食べたり飲んだりしている食堂の短大生の満ち足りたような顔が並んでいるよ。はてさて、いまは授業中じゃあなかったかな？と、ちと心配になる時間においても、そうなのだ。こんな短大生の姿は、昭和三十年代には、全く考えられもしないものだったねえ。いつたい、あの大学のボロの木造二階を間借りしていた頃の短大生は、お昼の弁当など、お茶なしで、どこでどうやって食べていたんだろう？

たしか短大が三春台から六浦に完全移したのは、昭和二十九年三月だった。そして、念願の短大館が六浦校地、神学部礼拝堂横に出来上がったのが、三十七年三月だから、この頃の短大生は、丸々八年間、不自由な間借り生活をしなければならなかったわけだ。思いうすね、よく柳生さんと以下のようなことを話したりしたことを。「こんな殺風景で、うすすぎない校舎の学校に、女の学生がよく来てくれると思うよ。おれはね、兵藤さん、

ふとそう思うと、心の中で、彼女達に手をあわせてね、ありがとうよ、と拝むような気持ちになるんだよ。どうだい？」

「同感だよ、まったく。彼女達は出て来たばかりの高校の方が、ずっと女らしい環境の人が多いだろうからねえ。」

もちろん、学校が校舎だけ立派でも学校とはいえぬことはよく知っている。だが、だが、現実には、二階のユカから下手をすると下の教室がスキ間ごしに見えたり、また、同じ列のどこの教室での授業が早く終つたりすると、板廊下を多勢の足が歩くため、その音にじやまされたために、授業を中断せざるを得ないなんていう校舎は、まずもって、教育環境が全く不適切であったわけだ。おまけに、おまけに、それがミエうるわしシズヤカにして、デリカシイに富む乙女たちの館とあつては、どうしたって授業料の何分の一かは、あの時御返済致すのがもの理というもんじやあなかつたかしらむ。

(次号につづく)



# 思ひ出す事

安藤 寿々代



女専として発足して以来、短大とともに歩いて来た私にとって、最も色濃くい出は、と申しますと、やはり幼児教育

科の増設ということになります。その設立に当りましては幾多の迂余曲折がありました。私はさきに短大創立三十周年記念誌にその折のことを書きましたので、重複を避けたいと存じますが、設立以来七年を経て内容、外観とともに整ってまいりました幼児教育科のことにちの姿を見るにつけ、故坂田院長のことを思い出さないわけにはまいりません。

坂田先生は常々、口癖のように「女子教育は良妻賢母をつくる事にある」と仰っておられました。現在幼児教育科を備えて「賢母」の育成に万全の構えをみせている短大の姿をごらんになって、先生も多分、満足なさっておられるのではないか、と思うのです。その坂田先生御健在のころのことを追想いたしま

すと、今でも快い微笑とともによみがえって来るひとつの出来事があります。

或る日、私は講堂で授業をしておりました。学生は下の席の前の方にかたまつて坐り、私はステージの上から指揮をしていたのですが、ふと気がつくとき坂田先生が講堂入口のドアのところ立って歌声に聴き入っておられる様子なのです。私は流石に緊張して授業を続けおりましたが、やがて先生は前の方に進んでこられてははじめは右端の席に、それから左端の席に坐つて腕組みしながらしばらく目を閉じておられました。やがて入つて来られた時と同様静かに出て行かれました。先生はふだん「ワシは音楽は判らぬ。ワシの知っているのは軍歌だけだ」と仰つて「道は六百八十里……」と、日露戦争従軍当時の軍歌を歌われるだけでしたので、先生がこんなに熱心に私の授業をごらんになったということは感激であると同時に大きな驚きでした。その授業のあと早速「先生、いつもワシは音楽は判らぬ。などと仰つてるのにお判りになるじゃありませんか」と申し上げると、ニコリともせず「いやワシは新講堂に入れる椅子の坐り具合を考えていたんだ」。

後期からは、四号館の増設によりミュージ

ックラボ、視聴覚教室等、完備された施設をごらんになった坂田先生が、天国で満足そうなほほ笑みを浮かべながら椅子の坐り心地を試していられるお姿が見えるような気がいたします。

短大の今日あるを思うとき、過去の多難な時期に病に倒れるまで力を尽くされた楡垣先生、短大の黒字経営を守り抜かれた上市事務長の御苦労を偲ばずにはいられません。勿論このほかにも一人一人のお名前も挙げ尽くせぬ多くの方々のお力に支えられて参つた事は申し上げるまでもありません。これらの方々の篤いお志に心から感謝を捧げるとともに、今後の短大の発展のために、私共一同力を尽くして参りたいと存じて居ります。



## 昭和五十年代の短大

山口和子



今年、昭和五十五年は五十年代のちょうど半ば。此の年短大は三十周年を迎える。

つい数年前までは関東学院に、女子短大があることすら知る人ぞ知る程度で、優雅にひそやかな存在だったように思う。それが時代の趨勢というのか、社会的要求なのか、地理的条件が幸したか、おおいなる神の思召からか、ここ十余年の短大の発展ぶりは、その規模・内容からみて、目覚ましいものがあるといえよう。

この短大発展の大きなはずみとなったのは、当時の林学長の発想から実現した、昭和四十四年度の家政科栄養士養成課程、四十八年度からの幼児教育科の開設ではないかと私は思う。そして従来の英文科・国文科とのバランスの中で相互補完的に成長した。編集子の希望に従い、ともかく昭和五十年代、ここ五年間の動向の一端を並べてみよう。

最も大きな出来事の一つは、短大の室の木校地への総移転である。ハンソン山あと、室の木校地へは体育館の設立を皮切りに、現在の三号館が幼児教育科の発足と同時に四十八年に完成、使用されはじめた。五十三年春に一号館、五十四年春に二号館と次々に白亜の瀟洒な校舎が出来上り、この年移転は完了した。はじめての短大だけの校門もできて、ようやく女子の教育環境らしいたたずまいになった。そして本年十月初には四号館教室棟が落成する。建物ばかりではない。英文科のLの完備や教材の豊かさ、念入りに蒐集された国文科の図書や書道室の整備、家政科の近代的機能をかなりとり入れた実験・実習室、幼児教育科の漸新で効率的なM.L等々。さらに視聴覚教室の新設備、学生食堂の開設と設備内容の充実には一段と力が注がれていて、以前の大学構内の短大を知る者には隔世の感を禁じ得ないであろう。

本学志願者数も急増。その数は五十年一度一六五〇名、それが五十五年度には三六〇〇名を越えるという具合に、年々増加の一途を辿り、現在一五七〇名が在籍。在籍増加には五十年度の幼児教育科の増員、五十四年度の家政科食物コース一〇〇名の新課程増が寄与し

ている。

この間には学長の交替もあつた。昭和四十九年九月から満四年間下田学長がその任にあり、五十三年九月から林学長が再任された。

短大の昨今の繁栄は、さまざまな条件と努力がうまく融和され醸成された姿である。短大発足以来の曲折を乗り越えて今日まで持ちこたえられた尊い事実。これを地盤に昭和四十年代中期からの林学長の現在を志向した種まきと培い。下田学長の全霊をかけた忍耐の育み。現、林学長の鋭い感性による企画力や円満な説得力と行動力。歴代学長のリレー的指導力のもとに教職員協同の協調。卒業生諸姉のすこやかな発展と支え。法人理事会の理解等々。

これからまた、より高い理想の実現をめざし、女子短大としての社会的使命を果たし続けるべき時が待っている。



## 座 談 会



編集部では親子二代で短大生活を過ごされた卒業生、または在学している方々にお集り願って、座談会を計画しましたが、色々御都合もあって次の方々に御出席願うことになり、五十五年十月四日に会を持つことができました。出席者は、

青木千恵子（英文二十八年卒）

青木美恵子（国文五十四年卒）

藤田功子（英文二十九年卒）

藤田直美（英文一年）

西村恵子（家政三十年卒）

西村雅恵（家政二年）

です。司会は上市事務長にお願いいたしました。途中で楽しいお話に、つつい聞いていただけではいられなくなり、編集委員もしゃしゃり出て、お仲間に入れていただきました。

**編集委員** 皆さん、お忙しい所をお集り下さいましてありがとうございます。香葉の発行にあたっては、少ない予算の中でいろいろな問題がありながらも、卒業生の皆様のご協力で第十号を発行するまでになりました。十年のひとくぎりを迎え、また今年(五十五年)は短大の創立三十周年ということで、歴史を感じさせられます。そこで、最近の短大と、創立当時の短大を、親子二代で過ごされた方々に、そのときおりの色々な思い出を含め、お話ししていただき歴史を振り返ってみたいと思います。それでは、どうぞよろしくお願ひいたします。

**上市** 今年は短大が三十周年を迎えましたが、従来うちの学校には、校歌がなく、カレッジソングなど高等商業部時代のを使っているとして、今回初めてできました。今までは大学の校地内にあつて、短期大学というものの存在が薄かったのですが、今度は、学校としての形体が整つてきて、対外的に独立してスタートしていく年になってきたわけです。それでどうでしょうね最初はやはり、若い方よりも、おかあさん方に思い出を語ってもらったらいかがでしょうか。年代を追って行くと、二十八年卒が青木さん、二十九年卒が藤田さん、三十年卒が西村さんですね……。今だに新入生を迎えるにあたり、学院物語とスライドを見せて学校の歴史を話しているんですけど、その中にちよと青木さん達が卒業した時の写真があるんですよ。

**青木・母** なぜ見せていらっしゃるんですか？

**上市** と言うのは、卒業式の時洋服の人と和服の人が入り混っているんですね。

**青木・母** たしかデクちゃんは着物で、袴をはいていましたね。

**上市** そうそう。着物もいれば、ワンピースとか、ズーッと長いくるぶしのところまであるような洋服で来ている人もある。かと思つと、スーツで来ていたりね。たいへん見づらいという事で、カウンになったんですよ。そうすれば平服で来ててもカウンスえ着けてしまえば、卒業式をみんな揃つてできますからね。

**青木・母** 校風なんでものはつきり定まっていまんでしたからね。卒業式の時のその服装ということも、たいへんそれぞれで心配しました。

**上市** それから、二十六、七年は食糧事情も悪かつたり、校舎なんかもひどかつたのですが……。

**西村・母** 当時の私達は、こちら(六浦)へ移つて来た時の家政科ですが、追浜に駐留軍の飛行場がありまして、授業中に窓ガラスが揺れるんですよ。

**上市** ヘリコプターがよく飛んできましたね。

**西村・母** そうなんです。ヘリコプターの音がガラスに響きましてね。わずか三十二名の小さいお教室の中で、声が聞こえなくなつてしまふんです。それから、私なんか体が小さいのに、よく廊下を踏み抜きました。(笑)またおけいちゃんが踏み抜いたつて言われて、よく笑われましたね。

**上市** 次に、お嬢さん方に聞く前に、家庭ではどうですか？その、「学校ではこういう事があつた。」「まあそう、私達の時にはこうだつた。」というような会話は出ませんか？

**西村・母** うちは、二人がそろつて家政科ですから、まず礼拝堂の話が出て、それから調理室の話が出ますし、この間リトリートから帰つて来て、「おかあさん校歌が出来たのよ。」つて言うんですね。

校歌の話が出ますと、うちはみんなで歌うんですよ。そうすると、これも校歌ね、あれも校歌ね。でもこれは短大のカレッジソングだし、と言ってよくもめていましたのね。でも今度は、ちゃんと校歌が出来てほんとうにおめでたいと思います。歴史を感じると共に、ただなつかしいだけじゃなくて学校としての体型がどんとと拡大して行くという意味ではとてもうれしく思いますね。

**上市** なにしろカレッジソングというのは応援歌みたいなものですね。ですからね。学院歌というのは、明治十七年のバプテスト神学校設立から数えてという、開学八十年記念式の折に作った学院全体の歌で、学院の諸学校全部で使うというのですよ。西村さんの他に、藤田さんのご家庭ではどうですか？

**藤田・母** 私共は、まず子供が幼稚園に入るころに、主人が男の子はぼくが学校を選ぶ、じゃ、娘はおかあさんが、ということでもう関東学院へ入れるつもりでおりました。高校のころに、柳生先生を新聞などで見まして、「ママの先生が出てくるわよ。」などという事で、親子ですごく新聞を見るのが楽しみで、父親は父親で息子と見るのが楽しみというような。

**上市** なるほどねえ。おもしろいねえ、そういう家庭もね。三春台だとやはり、「いんまぬえる」などが家庭に運ばれるわけですね。青木さんのところはどうですか？

**青木・母** うちは、私が役員をずうっとやっている関係で、学校の状態を常に見が知っているんですね。だもんですから特にあまり話しあいをしなくて、でも私が感じた事は、私達のころにあった礼拝が今はあまりないという事です。私がそういう礼拝で育っているもんですから、なんかパツと鼻歌まじりに出てくる歌はわ

りと、讚美歌が多いんですが、子供達にはそういうのがないんですよ。

**青木・子** 礼拝は毎週金曜日で、昼休みかなんかでしたけど、次の時間との兼ね合いもありまして、なかなか出られないという感じでした。たとえば授業前にやってくれた方がいいですよ。

**青木・母** 私達の時には、朝の一時限目と二時限目の間にありましたね。だからほとんど出ないわけに行かなかったし……。強制じゃなかったんですけど、やはり一応義務みたいな感覚でちよつとはいやでも出ていると、それが時にはハツと思いがけなく先生のお話が心に残りました。それが後日になってしみじみと、「ああ、そうか。」と分かっていった、そういう過程を経て一種の人間性が形成されていくようなところが、他の学校にないミッシヨンスクールの良さじゃないかなというふうに私共は思っていますけどね。

**藤田・母** ほんとうに、礼拝があつて讚美歌をやる雰囲気というのはいいですよ。

**上市** だからそれで天城山荘はぜひに欠かすことはできないということなんです。

**青木・母** あの、リトリートで天城山荘を使うようになったのは、私達よりずつと後なんです。私達の時はそういうきちつとしたのがなくて、箱根などの旅館を借りて行っていましたので、どちらかと言うと宗教的な雰囲気からちよつと離れていましたけど、それでもやはり方々から集まって来た生徒がその機会に親しくなるって事が別にありましたね。

**編集委員** あの、お嬢さん方は、リトリートに行ってみてどんな事が心に残っていますか？

西村・子 みんなプリント見た時から、礼拝ばかり多くて行きたくないって人が多かったんですよ。(笑い)せっかく天城に行くから、どこかいろんな所へ行けるとみんな想像していたら、礼拝に釘づけみたいになってしまって、それに「奇蹟」という題は、とてむずかしい題でした。私、アドバイザーの先生にも話したんですが、私はずつと小学校からキリスト教の教育を受けて来てもむずかしいのに、みんななんか初めてキリスト教を受けて、「奇蹟」というのを、ただ「偶然にあった事」としか思っなくて宗教的に考えてないんですね。だから、「奇蹟」というのは、あると思いませんとか、ないと思えますとか、「偶然にあった事」は「奇蹟」とどう違うかとか、そういう事にしか話が發展しないんですね。ですから、もうちょっと簡単な題で、先生がたくさんいらっしやるのですから、いろいろな先生方のお話を聞いたら良かったのじゃないかなと思います。

編集委員 では、アドバイザーグループの事はどうですか？

青木・母 子供と話していると、子供なんかもうそだと思っくら私達は先生方と密接だったんですよ。ですから、先生と生徒の間が兄妹みたいで、「おい千恵子」って言ったような調子で……。だから柳生先生にも授業でなく、個人的に何かする時には、「おちよこ」って呼んだんですよ。

上市 直行と書くからね。

青木・母 それでも先生はおこらなかつたし、でも、授業の時は先生の事を先生として、言葉づかいのけじめはつけていましたよ。

青木・子 アドバイザーグループの先生も、今は、学生の人数が多いう事、面倒見きれないと思います。私はアドバイザーの先

生というよりも、むしろ千葉先生がスポーツの趣味がおありになって、私が二年の時に、個人的に取らなくてもいい体育を取って、テニスの合宿にいっしょに行つてすごく楽しかった。それが一番の思い出なんですね。

西村・子 機会さえあれば、天城に行った時なんか、先生と仲良くなれたのだから、学校で計画したり、アドバイザーの委員を決めて計画してくれば行くけども、そういう機会がないから、あまりまとまらないのじゃないかと思えます。

西村・母 私達は学校から計画してくださったものというのは、それほど数はないですね。

青木・母 私なんかの時はね、レコードコンサートをしましょう、ソシヤールダンスの会をしましょうなんて言うのと集まるんですよ。場所って言ったら地下室の薄暗いつまんない所ですよ。でも積極的をやつて来たから後になって楽しかったのかなと考えるんですけど。

西村・母 ボランティア活動でも、そういうのは、私達の場合は宗教部が主催になって、人形劇をやっていたんですが、人形を持って孤児院、戦争孤児のですね、そういう施設に慰問に行ったり、養老院へ行つて雑布をぬつてあげたり、おむつを洗つてあげたり、お掃除したり肩をたいたいたりしました。

藤田・母 宗教部に入つてなくても、慰問に、各家庭に行つたのを覚えておられます。カリエスなどで寝ている方に……。

西村・母 課外活動だね。

西村・子 授業が終つてから？

上市 そうそう。放課後ね。今みたいに五時半までつてのはないからね。

**編集委員** では、今放課後はどんな事をしていますか？

**藤田・子** 友達といっしょに雑談したりしています。おいしい食べ物屋さんの事や洋服の事とか情報交換しています。あと、まだ一年生なんです。就職の事を話す時もあります。私は高校が三春台だったので、三春台からの友達が多いのだけど、短大でまた今までとは違った友達と話しあえる事も楽しいですね。あと、旅行に行ったり、千葉へ夏休みに友達と二泊三日で泳ぎに行きました。夏休みには、お料理もしたり……。

**藤田・母** お料理のレパートリーが増えたわね。

**西村・子** 結局、今と昔は環境が違うから、関心が違うし、昔はあまり遊ぶ所がなかったけど、今は余暇があつて、レジャーとかスポーツなどがのびてきているから、どうしてもそちらの方に関心が行くのだと思います。

**編集委員** そうですね。あと服装の事などに話を向けますと……。

**青木・母** そのころは、駐留軍の人達がたくさんいまして、みんなフレヤーのペエーラ、ペエーラした長いスカートを揺らしながら歩いていましたね、私達も真似して着てた事ありましたね。

**西村・母** 私は、戦災をまぬがれた、横浜に何台きりしかないという、シンカーミシンをちょうど母が持っていましたね。私の家にお友達が何人も集まって、スカートを縫ったりして、それも白い生地しかなくて、それに自分達で刺しゅうしたり、絵具で描いたらどうかと思つて、でも今みたいにすばらしい顔がなかったから、にじんでしまつて、ベソをかいたりした事もありました。ですから今の学生さん達を見るとカラフルで、ほんとうに楽しんで生活をしてるんで、そういう点ではとてもいいなあと思います。

**編集委員** 今はどうですか？

**藤田・子** ちょっとカラフルなのを着ると「そんな派手な格好をして」と言うんだけど、でもね学校へ行けばもつと派手な人もいるんだし……。(笑い)

**上市** 夏の場合ね、海辺で着るようなのを着てくる人がいて……。

**編集委員** タンク・トップみたいのですか？

**上市** ちょっと僕らが見てもひどいなあつて思うね。

**西村・母** いつの時代も親が言う事は同じですね。遊びとのけじめをつけるという事です。

**上市** では、今度は夢を語るという面では、六浦から大船へ行く道に朝比奈峠がありますね。あそこの右手の山を、二年がかりで交渉しています。今の六浦の校地が十二万平米あるんですが、今度買う所は十六万平米もあり、短大と大学で使うのです。そこが手に入りますとテニスコートだけでも四面ぐらいできます。ですから、管理さえうまくやれば、日曜日などは卒業生も使用できるようになると思いますよ。それから、今くすぶっている話では、公開講座を来年あたりからやりたいと言っていますが……。

**青木・母** 是非ともお願いしたいですね。

**上市** そうやって地域社会に貢献していく面でも卒業生の還元をしたいということですね。

(四時五分のチャイムが鳴る)

**編集委員** では、チャイムも鳴りましたので、この辺で。今日は、おほか様方の学生時代の積極性にとっても感心させられました。楽しい思い出話をどうもありがとうございました。



# 覚え書 (十)

女専・短大小史

上市 二郎

会誌「香葉」が発刊されて早くも第十号の完成を見る歳を迎え、この「覚え書」も綴ること十回目となった。

さて、前回は本学として、初めての北海道旅行が実施された昭和二十八年七月のこと。七日より十五日までの旅程の途中まで……実に神秘的な摩周湖に魅了された学生達の様子を記した処までで終った。

摩周湖の見学を終えた一行は、再びバスの人となり、エクボ道路（第九号参照）を通して川湯温泉をあとに弟子屈駅へ向った。ここより列車で札幌へ向うことになるが、出発の前にプラットホームへ地元の人々が集つてきて、五色のテープを列車の窓辺の学生達に手渡し、話題を色々変えては話しかけて発車のベルを待っていた。青函連絡船の出港のときとか、観光地などで団体客が旅館からバスで出発するときなどは良く見かける光景だが、

駅のホームでは珍らしいことだと思つた。観光客の少ない時代で、地元の人々にとつても内地からのお客さんは珍らしいことで、心より歓迎してくれたのであろう。やがて滑り出した列車はホームの人々と学生達とをテープで引き合う形となり、張り詰めては切れ、次に色とりどりのテープが風に乗りS・L・(蒸気機関車)の煙と共に後尾の車輛にそつて流れていった。

「また、今夜も車中で夢路を辿ることになるのですね」誰言うともなくそんな言葉が耳に入ってくる。そんな折、汽車はトンネルに入る。そのたび毎に窓を締めないとS・L.の煙が容赦なく入ってくる。大変気ぜわしい時代だった。またもや、あちこちでゲームも始まっている。中でも麻雀は外野席の人々(一般の乗客をこう言つてみた)の口がうるさい。「筋だから通る〜」とか、「良く場を見ないと振り込むぞ!」とか……色々な人々を乗せて列車は進む。

次の朝、札幌駅へ着く。現在のようなベージュ色の近代的な駅ビルではなく、明治時代の遺物としか思えない煉瓦造りの建物であつて、それがまた実に印象的であつた。その古い駅はオリンピックを界にしてこのような駅

ビルに変わったのだそう。街そのものは原始林を切り開いて造成し、基盤の目の如く整然となつており、大都會をそっくりそのまま切り取つてきて、はめ込んだよう余りにも近代的な都会なのに学生達も驚いていた。高層ビルの建っている敷地内にも古い樹木が立ち並び原始林時代の面影をこんなところにも残していた。札幌に於ける主な見学地は、植物園、北海道大学、月寒牧場(羊が丘)、丸山公園などであるが、これを済ませてまたも列車で移動するのである。次は白老のアイヌ部落へ向う。この辺りまでくると、ほとほと列車の旅もうんざりして来る。そして、その上に必らず鮭か鱒の入っている駅弁、また駅弁と続くにはいささか食傷した。やがて白老の駅に着く。アイヌの酋長宮本さんの家が駅より見て何れの方向にあるのか、交通公社の高木さんも聞いて歩くので仲々時間がかかる。やつとのこと、本当の本物の酋長宅を捜し



当てて見学するという末開の興味ある旅だった。それから数年を経て、また、この白老を訪れる機会に恵まれた。白老駅に着くと以前に来たときは全く反対側へ案内人が歩いて行くので不思議に思ったが、それでもついて行ってみた。別の所が発見されたのかな?とも思いながら道を進んで行くと、やがて路の両側にみやげ物屋がぎっしりと軒を連ね東京浅草の仲見世通りを思わせる感があった。この路を通り抜けた所にアイヌ部落なるものが造られていた。古風な造り、酋長の家は立派過ぎるものであったが、この部落全体が未だ出来たばかりの新しいものばかりだった。自然味溢れるかつてのアイヌの生活様式は何処へやら消え去って、観光客のための模造品が並んでいるように思えた。余りにも観光地化した白老、全くがっかりした。

さて、本筋に戻り、白老の見学を終えた一行は洞爺湖に向う。駅名も当時は虻田と言ったが後に現在のような洞爺と改名された。虻田で下車して待っていたバスで洞爺湖へ、途中見晴しの良い場所までバスを停め、ここより見下ろす湖水の風景、ドーナツ型をした湖水の美しさは今でも忘れられない者が多いことと思う。円型の湖水の中央に円い中の島が

あるので、ドーナツ型の湖水として有名なが、途中森駅より内陸線に入り、あの有名な美しい駒ヶ岳を左手に眺めながら列車は進む。大沼、小沼の風景にうっとりしている学生達、景色より半分は疲れもでてきうのであるが、途中森駅より内陸線に入り、あの有名な美しい駒ヶ岳を左手に眺めながら列車は進む。大沼、小沼の風景にうっとりしている学生達、景色より半分は疲れもでてき

ら登別に向うことになる。登別の駅前を通過する頃は、もうすっかり太陽も西に沈み、辺りは夕闇が迫ってきていた。駅の周辺には何もなく田畑があるだけで、埃のむんむんするような田舎道をガタガタとバスは進んだ。くねるようになって山合のここは公道を縫って暗闇の中にヘッドライトの太い光を投げながら走って行く。突然(余りにも突然に闇の中からまばゆい光が飛び込んできたように感じたのでこう記した)真っ暗のためか、地形の関係か、突然目の中にスズラン型の外灯アーチとそのうしろに広告灯のネオンの光が一緒になってみんなの目に飛び込んできたのだ。こんな山の中に、こんな華やかな街が存在していたとは、と一瞬亜然とした。「ここが有名な登別温泉郷でございませ……」とガイドさんは言う。一行にとつてはここが道内に於ける第二番目の宿泊地であり、また、道内最後の宿でもあった。

翌日地獄谷などを見学し終った一行はバスで登別の駅に戻り、ここより、またもや車中の人となった。室蘭本線を上り一路函館へ向うのであるが、途中森駅より内陸線に入り、あの有名な美しい駒ヶ岳を左手に眺めながら列車は進む。大沼、小沼の風景にうっとりしている学生達、景色より半分は疲れもでてきうのであるが、途中森駅より内陸線に入り、あの有名な美しい駒ヶ岳を左手に眺めながら列車は進む。大沼、小沼の風景にうっとりしている学生達、景色より半分は疲れもでてき

横橋を離れて行く連絡船(羊蹄丸)。函館山の景色を眺めながら津軽海峡を渡って内地へ向う。青森に着いた一行は、待っていたバスに乗り込んで揺られ揺られて四時間程、細い道をくねりながらバスは進み、やつこのこと十和田湖畔休屋に着いた。ここが今回の旅行の最後の宿泊地である。湖畔の宿、旅館太陽に到着した学生達は、じつくりと腰をすえて今迄の買ったもの、集めたものの整理をしながら友人と愉快に談笑している者、三三五五湖畔を散策する者、未だ足りなくてみやげ物を捜しに走り廻っている者など思い思いの行動に移っていた。やがて全員揃ったの会食第三回目が始まった。

横濱を発つて九日間の旅の中で全員揃って食事ができ、そして宿でゆっくり足を延ばして寝られるのがこれで三回目、という強行スケジュールだった今回の旅もいよいよ終りに

近づいている。この宿、旅館太陽での出来事は今でも忘れられない思い出として残っておられる方が多いと思う。あれは、丁度食後のくつろいだ気分の頃から始まったのか。十和田湖に住みついている湖水の妖精の話。英文科の学生は先生を囲んで夢中だった。そして、その夜半のことになるが、英文科の学生の悲鳴とドタバタ騒ぎで目がさめた。聞く処では十和田湖の水の妖精が白い姿で亡霊と化して出てきたとか。この騒ぎで隣りの部屋で寝ていた家政科の学生は寝ぼけて火事騒ぎと感違いで、急いで自分の荷物をまとめて階下へドタバタバツタンと階段を駆けおりて逃げ出した。この騒ぎは旅館の番頭さんにまでおよび、「一体何が起ったのですか。」と。

翌日、バスに揺られて四時間余り、再び東北線の列車の人となった一行は、一路上野へ向うのであるが、学生の様子を見てみると今回の旅の初日、即ち上野から青森へ向う車中での様子とはすっかり変ったのに気づく。その一例は、夜行列車で朝を迎えると洗面後は目薬を使用して目をパッチリと、美しくとか、食事、特に駅弁が多いが食後は消化剤を飲んでおかないとすっきりしないとか、色々理由をつけて女性らしいつつましかな態度



で行動していたのである。ところが余りにも様子が変わったので、学生に途中で尋ねてみたところ、「寝起きのマナーも食後のマナーも忘れてしまつて、疲れた軀にはひたすら寝るのが一番楽になります……」ということであつた。何はともあれ、何事もなく初めての北海道旅行は終りを告げることができた。当時の学生には今でも良き思い出となっていることであろう。

七月十一日(土) 十二日(日)は英文科第二部の夏期修養会が葉山の霊翠館に於いて実施されている。参加者は四十名となっている。八月十日(月)より十四日(金)まで運動部主催で奥日光湯元(栃木県上都賀郡日光町大字日光湯元)でのキャンプが実施され、光畑、兵藤、門根の三先生が参加してその監督、指導の任に當つておられた。旅費、宿泊費、東照宮参観料を含め費用は千参百円となつており、持参品も聖書、讚美歌に、お米一弁一

合(約一六五〇グラムぐらい)、弁当三食、飯盒、セーター類、副食および調味料、洗面具となつていた。

当時はアメリカへ渡るといふことは並大抵のことではなかつたと思つた。そのような時代に相川先生は一カ年間渡米することになつた。行先は米國ペンシルヴァニア州のクローザー神学校である。そしてペンシルヴァニア大学院に於いては一カ年間キリスト教社会学並びに米文学を研究されるため。出帆は八月二十日から三十日の間の船のことだつた。相川短大部長の不在中は、各科(英文科と家政科)の主任がその責任を分担して当るといふことになつた。船の都合で前述の日程よりもおかれて九月二日(水)にやつと乗船された。たしか乗船は午後四時頃だつたと記憶する。が、船が静かに岩壁を離れる頃は午後八時を廻つていた。船はO.S.K.L.(大阪商船)の北海丸であつた。(つづく)



# あの頃と今の私

門根 静子



冷夏の不順な天候から秋を迎えた十月半ばに、会長の古城さんから香葉会十周年記念誌を出すので、何か昔のことを書いて下さいませんかとの電話がありました。実はこの春、

短大創立三十周年記念号に「あの頃を思って」と拙文を書きましたので、元來書くこと、話すことの手得手な私ははたと困り婉曲にお断りしたのですが、丁重極まる古城さんのお話しぶりに、つい承ってしまった次第ですが……。

古城さんのお声を聞いているうちに、二十数年前のあの三春台のさまざまなことが次から次へと懐かしく思われ、消えかけているかと思っていた私の中の若い血が燃えてくるのを覚えました。

種類の少なかった体育実技を皆さんと一緒に楽しみ汗を流したことは、遠い日のことですので、ついこの間のように思われます。皆さんと陽光を浴びながらの屋上ででのフォークダンスに時間の終わったのも気付かず、次の授業の先生に平謝りしたことも何度かありました。そのうちにビヤ樽ポルカは屋上でやることをきつく止められました。ドストドスンとひびいて、ひび割れなど破損箇所が大きくなったからです。この踊り方の、ヒル、トウ、ポルカステップがうまく出来ない方達がいる、要領を覚えてもらうのに苦勞いたしました。中には初めにヒルを斜め前に出すのを、トウを出し、トウ

を片足のそばにつけるのにヒルをつけ……と反対を上手にやる人もいましたのでまねてみましたがいまがうまく出来ないで大笑いをいたしました。今の若い方達にはとても考えられない程ダンスの才能が一般的に欠けていたようです。今でもあの軽快なポルカのリズムを耳にいたしますと町中でも私の足元は踊り出してしまっています。こう書いているうちに急にビヤ樽ポルカが踊ってみたくなくて、狭い部屋の中でやってみましたが、ドタドタとしてあの軽快なリズムがなくて、情けなくて坐りこんでしまいました。あの頃の皆さんはまさかこんなことはないでしょうね、一寸動いてみて下さい。

ご承知のように三春台時代にアキレス腱を切り、捜真に参りましてから背髄分離症の腰痛に悩まされ、背骨腰骨の老化が早いよううてすが動かせるだけ動かしております。

この春、突然左膝の激痛にガツクリし、加えて坂道で転んで右足首ねんざで内出血で倍程にも腫れ上り、痛みで気が遠くなりそう、その晩は氷をビニール袋に入れてしっかりと右足に結びつけて、ふとんの外に出して座ぶとんにのせて眠れぬ夜を過ごしました。気がついてみると白々と夜が明けていましたので何時の間にかよく眠ってしまったようでした。氷をつけた足はまるでポンドでも張りつけたかのようにそのまま座ぶとんの上であり、腫れも引き痛みも大分とれ、ほっと安心はしたものの、じっとして眠れたのは老いたからだと思つと、とても淋しくなりました。勝手です。膝の痛みも薄れてきました六月末、急に思い立ってチビ達と数年ぶりに尾瀬を歩きました。整備された木道に驚き、綿スゲの群落に歓声をあげ、早咲きの日光キスゲの色に見とれ、小さな沼に咲く可憐な水草に、うす雲のかかった連山に、自然美を造り賜うた神の摂理をほめたたえまし

た。又夏には妙高高原へ、秋には秩父路と奥塩原など大きな自然の中を行くことの出来た幸せを、今までがあつたから今も、そしてこれからもと、生きていることの幸せをしみじみと毎日の仕事の中に感じております。

街で腰を曲げ背中を丸めている私に出逢つたら「ポン」と背中を叩いて下さい。今ならまだ反射的にびんと背すじを伸ばしますから。猫の顔程の公団の我が家の庭の黄色の野地菊の可憐な姿が、やがて来る冬枯の前のひと時の安らかな静けさを楽しませてくれております。

皆様くれぐれもお元気で健康に恵まれてお励み下さい。お逢い出来ますことを楽しみに。

元講師・保健体育科目担当（昭和二十九年退職）

## 思いだすまま

杉崎 日出子



学窓を巣立って早や三十年余り、いつまでも若いつもりで飛び廻っておりますので、そんな長い年月が経過したような気が致しませんが本年は終戦三十五周年、廃虚の中で、五音放送に聴き入った世代は、もはや小教派に転じた八〇年です。あの思まわしい戦争から三十五年、物資豊かな平和な日々を思うにつけ、戦争をしない事の貴重さをひし

ひしと感じる今日此の頃です。本年は学制改革により女専が短期大学に昇格して三十周年の由、過ぎ越し方を偲び、感無量です。昭和二十年の終戦それから僅か七ヵ月後二十一年四月に、関東学院女子専門学校設立、生徒募集が発表されたのでした。横浜に初めて出来た唯一の女子専門学校でした。戦争で皆学問どころではなかったのです。その当時は大東亜共栄圏の理想のもと、の聖戦と皆心から信じ、男の人は戦地に、銃後の人達は、それぞれにお国のために欲しがりません勝つまではと、空腹を抱えて頑張ったのでした。学徒勤労動員といって学生達も工場に出て働いたのです。今の若い方々には想像もつかぬことでしょう。食糧も衣料も配給制、徹底した耐乏生活であつたのです。父、母、兄等、戦争のために愛する人々、かけがえのない人々がすべて次々に死んでいったのです。この悲しい犠牲のもとに得られた貴重な平和でした。皆我にかえて勉強しなくてはと入学試験に殺到したのでした。当時私は二十四才、三才の幼児を抱えての勉強でした。昭和十九年二月に夫は戦死、これから子供を抱えて、一人生きて行くのには、先ず資格をと考えての決断でした。一度家庭に入ってからの受験で、何の勉強もしていないのですから、果してパス出来るのか随分心配しました。試験場には、高校を卒業したばかりの若い人々ばかりで心細い限りでした。併し当時の高校生は勤労動員等に狩り出されあまり勉強して居られなかったようで、何とかお仲間入りさせて頂きました。英文科2クラス、家政科1クラスで女専は出発したのでした。私の入ったクラスはA組でした。級友は、私が最年長、Nさんは二十二才、Aさん、Oさんは二十才、Kさん、Yさんは十九才、その他の方々は高校を卒業したばかりのうら若き乙女でした。殆んど捜真出身の美女ばかり。時

田先生の御令嬢暁子様、悦子様、安村先生の御令嬢敬子様、れい子様、光畑先生の御令嬢晴子様、現在神戸女学院の教授として活躍なさっている才媛の誉れ高き駒野さん、女専をトップで卒業なさった中野さん、財閥に嫁したKさん等、多士済々でした。これを率いる校長先生は、四十才そこそこの白哲の美青年相川先生でした。自ら哲学者を任ずる素敵な校長先生でした。英文学の横沢先生、文法の荒木先生、国語の川端先生、聖書の時田先生、女の先生は英米文学の大塚、小滝女子、音楽は身体中フアイトの塊のようなきびしい安藤先生、英会話はミセス・タッピング、発音の厳しかった光畑先生、温厚な紳士の安村先生、英語の基礎を叩き込む名人の天下先生、家政科の松垣先生、角田先生、体育の門根先生、絵画の水船先生等皆御立派な心やさしい先生方でした。現在の英文科は、最新の機材教材が揃い万全の教育をなさっておられる由、三十四年前の開校当時を偲び、隔世の感を禁じ得ません。三春台の焼け残った校舎で、教科書だけ、何の設備もありませんでした。

相川ゼミ、荒木ゼミ、川端ゼミ等色々なゼミにそれぞれ所属し真剣に勉強したものでした。名将のもとに弱卒なして、三年の時には文部省の教員免許状の資格取得試験があり、私達の猛勉のお蔭で、これを獲得したのです。以後の後輩が無試験で免許状を手にするこゝとが出来るのは、偏えに我々の努力の賜ではないかと自負して居ります。光畑先生の御指導のもと、すばらしきシェイクスピア劇「ベニス商人」を上演したことも今はなつかしい思い出です。安村れい子さんを中心に小山さん、平部さんその他六人位のグループが、毛糸で編んだ六角形の手製の帽子を頭にのせて、チャペルで聖歌隊として、美声をふるわせたのも昨日の如く思い出されます。色彩の

乏しいその時代に、一際華やかな存在で、皆の心を和ませてくれました。美人で美声の持ち主のれい子さん、秀才でしっかり者の暁子さんは今は亡く、痛恨の極みです。

御高齢の坂田院長先生も御健在で、月に二回位、御高話を伺ったものでした。院長先生、安村先生、光畑先生、海老塚先生、中井先生、遠藤先生、近くは水船先生まで天国に召され人の世のはかなさをしみじみ感じるものです。御冥福を心よりお祈り致します。

横浜市立境木中学校校勤務（女専英二十四年卒）

## 短大生活での素晴らしい思い出

木村孝子



都内の受験に失敗した私は捜真の仲間と関東に入学した。何か近過ぎるといふ感覚があつて本意であつた。でも今は、一番楽しかった時代と思う。女ばかりの園から出て、さまざまな解放感を味あわせてくれる。何かが「大学」には当然あつた。かなり優秀な友人が入学したせいもあり、又一年先輩には安藤先生のお嬢さん達です。E・S・Sで活躍していらしたので、私達も積極的にE・S・S活動を開始した。入学後すぐに、校内英語スピーチコンテストがあり私達も大勢参加した。全部で四十人以上の参加者がいた。私は「父の忠告」について語った。今でも断片的には記憶しているが、たいした内容で

もなかったと思う。ただ、わかり易い言葉を選んだせいか、一位の成績を頂いた。上位は友人達と占め、四年制の男子学生達をうならせた様だ。二位は現在でも短大のL・L教室で演習助手として活躍していらっしやる新海さんでした。英語力は私よりずっと上でいらしたので私の運が良かっただけの事と思う。賞金三千円也喜んで父に見せた日を覚えてる。E・S・Sの中にI・S・A部門が存在した。国際学生協会の略。全国各都市で組織され支部を成し、夏休みの幕開けと共に海外の学生を招き、会議を開く。我々横浜支部群、国大、市大、神大、防衛大、フェリス等の代表委員で横浜大会の準備を行なう。六月初旬より市内各会社に寄附依頼のため各自リストを持って歩く。私も友人とかなり集めた。その年は氷川丸で宿泊した。船内がむし暑かったので、甲板で夜明けまでにぎやかに語り合ったことがなつかしい。山下公園の前に、アメリカ文化センターがあつて、大デイスカッションが熱っぽく行われ、巧みな英語が交された。ベトナム戦争についてであつた。二年間続けて大会に臨む事が出来、収穫を得た。一年目の横浜大会後、外国人学生は他の都市に向かい、それに従つて我々もオプザバーとして他の大会を訪ねる事が出来た。京大、同志社等見学もできた。京都市内の美しい庭園で歓迎レセプションが開かれ友人と出席した。その時一人のエチオピア人に再会した。当時彼は公費で来日していた研修生であつた。横浜で顔を見る程度の人であつたが、京都ではよくしゃべることになつた。アスマレ・レゲツシイと言つた。目がとてもきれいで黒人とヨーロッパ人の二面する雰囲気をもつ人という印象がした。もちろん日本語はうまかつた。でも英語で通した。横浜に戻つてから一度自宅に彼から電話がかかつて来る様になつた。私はひそかに香港

大学から来日していた学生に、ちよつぱりあこがれていたのが、がっかりした。レゲツシイは私がどこかで歌つた「テネシーワルツ」を気に入り、電話ではいつもそのリクエストだつた。家人にはよくからかわれ、笑われた。父は彼が余り熱心なので結婚でも申し込んでくるのではと内心ひやひやしたらしい。外国人の友を持ち、大いに学べよと言う父が国際結婚にだけは偏見を持っていたのだろう。私達の間柄はただの友人であつた。後、彼は別の日本女性とゴールインした。しばらく音信が途絶えた。ある日突然連絡が入り、慶応病院に入院しているから来てほしいという事だつた。東京まで見舞うはめになつた。病室に入ると小柄な感じの静かな紳士達がいた。その中の一人を見て驚いた。オリンピックで大活躍した今は故、アベベ選手であつた。彼は私にレゲツシイ夫人かと尋ねた。まき舌のような英語が今でも忘れられない。レゲツシイを通して知り合つた外国人、特に大使館関係の方達は、何度か横浜の自宅にも訪ねていらした。その時一才の赤ちゃんだった姪がもう今年高校一年だから月日の流れを考えさせられる。

こうした一方、I・S・A主催の神奈川県下弁論大会で優勝し、全国大会宮城県まで出場。入賞は逸したが、アルバムには朝日イブニングニュースにのつた私の暗れの写真が残つている。

(英三十九年卒 旧姓山岡)



# 香報室



この欄は、卒業生の皆様の消息、感想文、等の発表の場として用意いたしました。今回も引き続き、昨年の総会出欠通知から無断で転載させていただいておりますが、短大香葉会「香葉」編集局宛、次号への原稿などお送り頂ければ幸いです。

昭和二十一年、焼跡の中から立ち上り学ぶことの楽しさを胸いっぱいにつくらせて、三春台の校舎に通った一年間、そして父の転勤で二年生の一学期、涙ながらに別れていった私でした。

二十才で結婚し、三十二年の歳月がたちました。主人は内科、小児科医。三十才と二十才の息子は歯科医になりました。苦しきの多かつたが故に喜びも大きく感じられた長い年月でしたが、今はもうじき三才になる孫、(男児)のおばあちゃんになりました。

先年、主人も私も洗礼を受け、指路教員として主の枝になれたことも、関東女專の教えと感謝しています。

\* 藤城栄子(山本) 22家\*

家庭の主婦として大いに学生時代に学んだ事を生かして、主人と二人の子ども(成人、男の子。男の中の紅一点、大いに張り切っています)の為に健康管理に頑張つて居ります。時には讚美歌等口ずさみながら、髪には白いものもマジッテ居りますが若い気分です。三年間の学生生活を懐しく思い出しながら。

\* 吉田弘子(村垣) 24家\*

先日、中二の息子が六浦の中学で行なわれた卓球大会のため、初めて私の母校を見てまいました。立派になった様子。すっかり御無沙汰していたことを思い出し、申し訳なく思っております。私が短大二年の時、初めて三春台から六浦へ移りましたので、先生方の御苦労は大変なことだったと存じております。お蔭様で元気に主婦業をいたしております。

\* 片方教子(及川) 29家\*

皆様お元気ですか? 今春一人娘が高校を卒業し東京の短大へ進学しましたので、只今のはのんびりと主婦業の暇を見ては、大好きな野球見物に打込んでいます。主人曰く「近頃のお前はまるで高校生みたいだね」って、口の悪いのは二十年前からですもの、平気…。近頃チョツと白髪が目立って来ましたが、デイスコも踊るまだまだ若いです。子供といえば野球選手の息子がもう一人欲しかったのに残念です。全く!

この春二度目のアメリカ旅行に行つて来ました。ハイ、四十六才まだまだ若いママです。忘れないで下さい。

\* 五十嵐かほる(金津) 30家\*



英語の教鞭をとって長い年月が過ぎました。横須賀ネービーで言語活動を楽しみながらコツクとして働き、関東学院で英語を学んだ、あの頃は忙しかったが、とても良い思い出として残っております。「ロメオとジュリエット」「十二夜」、卒業後もE・S・Sの仲間と行った「The importance is to be honest」の劇の写真も大切にアルバムにはられています。

(横浜市立港南台第一中学校勤務)

\*金子武人 33英二\*

主人の転勤で京都へ来て、はや十カ月。気候、風土が、同じ日本でもこんなに異なるかとびっくりしています。又、京言葉は何となく聞いていましたが、関東の言葉とニュアンスが異なり、やはり、住みなれないところは、住みにくいと思いました。早く横浜へ帰りたい。というのが現在の心境です。でも、こちらに在るうちによいところを見て歩いています。

\*天羽富江(高木) 36家\*

大宮の自宅に落着いて二年余、二人の子供も五年と三年に成長し、主婦業のかたわら自宅でピアノを教えています。(英文科卒後、

## "香葉会のつどい"のお知らせ

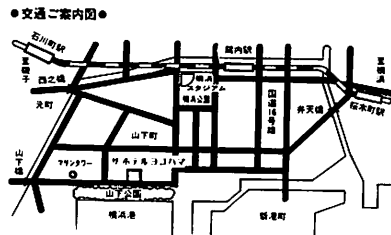
皆様 お元気ですか。

今年も同窓会の季節がやってまいりました。家事に、仕事にと忙しい毎日かと存じますが、初夏の一日、短大時代に返ってみませんか。年に一度の同窓会です。是非お出かけ下さい。

日時 6月28日(日) 13:30  
～15:30

場所 ザ・ホテルヨコハマ  
横浜市中区山下町6-1  
045-662-1321

会費 2,500円



尚、準備の都合上、同封の返信用ハガキに出欠、近況をお書き込みの上、6月22日迄にお返事下さい。

フェリス音楽科へ入学。又、大宮教会で(受洗して一年半)オルガン、聖歌隊その他の奉仕をしています。

英文科時代は、楽しい思い出がいっぱい。しばらくお会いしていない友人、先生等にもお会いして、ゆっくりお話でもしたいと思うこの頃です。  
\*永井八千代(佐藤)38英\*

五月二十五日に、新宿でエリオット先生(短大で長い間、教鞭を取られておりました)の長女スージーちゃんに十何年振りかで再会することが出来ました。私が彼女や妹のキャロルちゃんのベビーシッターをしておりました時は、スージーちゃんはまだ九十一才位の可愛いお嬢さんでした。まだ私の肩位までしかなかった背が、お会いした時は私の方が彼女を見上げてしまう程に大きくなられ、美しい Lady になられておりました。現在は、東京の会話学校で英会話を教えておられるそうです。七月には再び米国に帰られるそうです。キャロルちゃんはニューヨークでデザインの勉強を、ミセスは現在も時々筆を持って書道をなさるとか。

ほんの数時間でしたが主人、子供達をまじえてお食事をしながら、想い出話に、未来の

夢等、楽しく一時を過ごすことが出来ました。そして今度は、シアトルでの再会を約束しつつ……お別れしました。

\*川上妙子(奥田)41英\*

卒業生唯一の雑誌「香葉」No.九を、隅から隅まで、楽しく拝見しました。国文科第一回生として卒業し、早十三年。長男(八才)が郵便受けから大声で、「ママの学校からお便りですヨ」と、運び込んで来てくれました。子供達は母親の学んだ学校に関する興味は、想像以上です。誇れる学校として、私自身、三人の子育てと相まって向学心を常に燃やし自分自身を磨く事を新たにした次第です。

\*原鳴暁子(神谷)42国\*

転居、転居の繰返して建てた家も三軒目。それでもやっと広々とした庭が持てて、庭中を花で埋めようと頑張っています。草を一本もはえさせないのが自慢できます。

都会では見られなくなった雑木林がすぐ近くにあり、六月に入って椋鳥の大群が渡ってきて、朝晩の騒ぎはすさまじいものです。その林も、間もなく切り倒されるそうですので、来年は椋鳥達はとうするのだろうかとう心配して

います。

ひばり、かつこう、うぐいす、尾長鳥等々沢山の鳥の声、すいかずらや、あけび、桑の実と、子供を育てるのにもってこいの環境です。いつ迄もこのままだと良いのですが。

\*宗像なほみ(金杉)43国\*

あと数日で三十二才になります。今だに独身しております。誰かいませんでしょうか。いい人探して下さい。今、ヨガをやっております。おかげで10kgやせました。後もう10kgやせようと毎日努力しております。水泳などもやっておりますが、やせるといふ事は大変です。悩んでいらっしやる方、いるのではありませんか。頑張ってください。

\*齋藤理恵子 44国\*

早速香葉会誌を開いて、柳生先生のおつかしいお顔を見ながら読ませていただきました。卒業してから十数年……。先生はその頃まだ四十代だったのですね。辻堂の教会にも何度か行き、お説教をききました。短大時代、ヘミングウェイ他、アメリカ文学の充実した講義、今でも忘れません。Lighting Spirit とか、ハードボイルド、リアリズム等、多感

な青春の時代には、大変勉強になりました。今の生活にも考える上での訓練になり、役立っています。関東時代の先生方の教育がとてもよかったですと感謝しております。

\* 萩原久子（加藤）44英\*

卒業して早くも七年が過ぎ、その間に就職・結婚・出産と時の流れの早さに驚いています。仕事と家庭とを両立(?)させて毎日楽しく過ごしています。長男も一才二カ月になり、男としては少し早いかと思うのですが、十カ月で歩き始めたので、現在は飛んだり、はねたり、かきまわったり、もうおいかけっこくり返します。主人も同じ年に工学部を卒業していますので、十七年後には、やはり関東学院へ入学させるのだと、いつも二人で話しているところです。(川崎市役所勤務)

\* 冨塚恵子（田辺）49国\*

今年もまた関東の卒業生が入社しました。八年連続うれしナ……。(でも、こゝに、三年英文科の卒業生がいないのは、ちょっと淋しいです。)

先日、卒業生で結成(?)している、関東会なるもので、新入社員歓迎会を開き、学院

話に花を咲かせました。久々に短大生になった気分で、楽しいひと時を過しました。(日本石油株式会社中央技術研究所勤務)

\* 佐藤晶美 49英\*

保母として四年目を歩んでいます。つねに私となりには子どもたちと父兄が一緒に歩いて歩いている様な気がします。『保育所』についていろいろと考えさせられ、子どもの本当の幸せについて親と共に話し合っ、より一層素晴らしい保育にしようと思っている次第です。

時々、ふと学生時代を思い、アルバムをひらいてみたりしながら楽しかった日々をなつかしんでおります。『香葉会誌』ゆいゆいの学生時代への一本の糸のような気がして楽しみに読ませていただいています。(泉市立向陽台保育所勤務)

\* 斉藤和恵 52幼\*

結婚して八カ月、どうやら生活もおちついてきました。大学で知りあった主人と二人で毎週末の計画をたて、海だ、山だとさわいでおります。唯一の共通の趣味が旅行なのです。ぎっしりうまったカレンダーを見ては楽しく

て仕方のない日々、今度のお休みは友人の結

婚式に二人で出席、その次は西沢溪谷へ山歩き、その次は友人とスポーツ旅行。でも、このごろちよっぴり、早く赤ちゃんがほしいなあ、と思ったりもしています。

\* 鈴木洋子（谷）52家\*

短大を卒業して早三年、その間、中原養護の栄養士として、献立作成と給食調理に明け暮れております。私も今年三月に結婚をし、来年一月にはママになろうとしています。ただ今、仕事と家庭(主婦業)を両立させるところでの難しさを痛感しているところです。(神奈川県立中原養護学校勤務)

\* 佐藤知子（西潟）53食\*

この春から、自分の塾の看板をかがげられる様になりました。仕事も面白くなってきた今日この頃ですが、又、変化が有りそうです。この秋にはいよいよミセスに仲間入り。でも仕事は続けていくつもりです。自分の生徒は何と可愛いものなのでしょう。この子供達を見捨てる訳にはいきませんよ。(大城イングリッシュルーム勤務) \* 大城元子 53英\*

二年間、「幼児教育」を学び「幼稚園の先生

になるんだ。」と書いていきましたが、何故か「スポーツクラブ」の指導員になってしまいました。初めは「私にできるだろうか？」と不安で一杯だったけれど、短大生活の二年間が決して無駄でなかったことがわかってきました。スイミングでも、三才、四才の幼児では、水の中で歌をうたったり、手遊びもするし、体操の方でも、幼稚園、保育園などと変わりなく、学院で学んだことがとても役に立っています。たとえ、週に一時間、二時間であっても、成長期の大切な時期であるその一時間、一時間を精一杯、指導しています。幼稚園の方へ進むか、悩んでいたけれど、今では、こういう職業もまた違った形で子供たちとふれることができ、選んでよかったと思っています。(セントラルスポーツ株式会社勤務)

\* 川島陽子 54幼\*

最愛の我子も初めての誕生日を迎え、目の離せない毎日です。私が短大時代の「若さ」を失わないうちに、早く大きくなってくれれば……子供と一緒にいつまでも走りつづけたい、なんて思っているのですが、年齢差はいつまでも縮まらないものなのです。

\* 中村真由美(樽本) 54国\*

社会人となって二年目をむかえた今、働く事の大変さをつくづく感じます。とくに人間関係、これには本当に悩まされております。人間の身勝手さ、いろいろな矛盾、本当に耐えられない事ばかり。こういう事に慣れ、何とも思わなくなるのが社会人になるということならば、私は社会人になってなりたくない/なんて思うこのごろです。とは言え、やはり働かなくてはならないので、会社は会社とわりきって、余暇に楽しみを求めようと思案中です。みんなは元気でやっているでしょうか?(日貿株式会社勤務)

\* 大氏和子 54英\*

現在、私は三才児七名を受け持っています。よく、「おかさーん」なんて呼ばれてしまっています。言った本人も「エヘッ!」なんて照れてしまったり……一度だけ「おばさん」と呼ばれ、大ショック!ともかく笑いの絶えない毎日を、送っています。(れんげ幼稚園勤務)

\* 石塚美代子 55幼\*

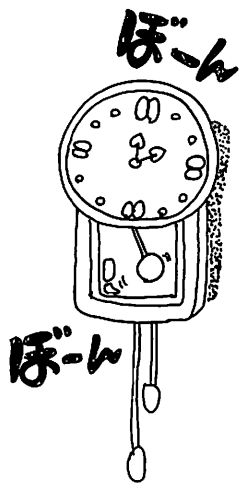
どうしても幼稚園に就職したい私は、アルバイトをしながら、私立幼稚園協会からの教員募集連絡を待ち、一方では今年の幼稚園教

諭採用試験の問題集を片手に勉強していました。その努力を神様が認めて下さったのか、念願がかない、七月一日より見習、九月一日から本採用として働く事になりました。これから私の人生が又、始まる様でとってもワクワクしている今日このごろです。

(私立境木幼稚園勤務) \* 渡辺勝美 55幼\*

薬品会社の事務として就職し、毎日「薬」と「数字」の中の生活。苦手のソロバンをパチリ、パチリとはじく音、どこからともなく匂ってくる薬品の匂いにもやっと慣れ「薬づけ」にされるのではないか……なんて思いながら、毎朝目ざめの悪い私は、ねほけまなこで出社致しております。しかし我社にも、私のような人間につける薬はさすがにないようです。(パカにつける薬はない……といえます。)

(安藤株式会社勤務) \* 大沢栄子 55国\*



# コーヨースポットライト

## 卒業後も関東学院の誇りを持って

青木 武志



「関東学院の英語か、英語の関東学院か」といわれるこのカレッジで英語を学び、卒業後それを活かして現在までに至った一卒業生としての歩みの一頁をここに記してみたいと思います。

関東学院で学んだ時代のことを今振り返ってみると、かなりの年月が経過してはおりますが、二年間という学業期間当時のことが、なつかしさをもってあざやかに甦ってきます。教授一人一人の顔、同窓生、クラブ活動の仲間などのなつかしい顔、そして多くの思い出が、過ぎ去った時間を飛び越えて目の前に現われてくるようです。関東学院の校訓「人になれ、奉仕せよ」とミッシェン・スクールの教えとして、坂田学長の人柄そのものを現わしている。この素晴らしい真理をもった言葉は、私自身卒業後に多くの人々の中で、英語という外国語を通して仕事を行い、常にイニシアチブをとるという立場からその言葉は私の体の中に、深く刻みこまれているものと信じています。

私は卒業後、一九六一年に“Aokian English Academy”という名

称の英語学習教室を設立し、そこで最初は中学生、高校生を中心として英語学習指導に従事してまいりました。一九六三年には“Aokian Japanese Institute”を設け、外国人(主としてアメリカ人)に対して、日本語のレッスンをを行い、それに並行して日本文化の紹介などの活動も活発に行ってまいりました。そのために、外国人に接すれば接するほど、日本の事物に対して英語でいかに表現すべきかという問題に直面し、それに対して重点的に勉強してまいりました。

一九六四年、東京オリンピックが開催された時には、その前後約四十日間を英語通訳として従事し、私の記憶では、その間に約九〇〇人以上の海外から日本を訪れた外国人に接し、英語を通して多くのことを学び、価値ある経験をいたしました。

その二年後、一九六六年には、幸いにも州立南ミシシッピ大学で学ぶ機会を得て、スピーチ・サイエンス、英語演説法、phonology(英語発音学) semantics syntax などを中心に学びました。その大学のある町は、ミシシッピ州の州都、ジャクソン市から南に車で約三時間ほどの所にある Hattiesburg という人口七万人位の町であり、いわゆる南部でも Deep South (深南部) という所で人々は親切で、あたたかい心の持主が多く、“Southern Hospitality” という言葉の通り、身にしみてかれらの人間性というものを感じました。いつでも一人で出かけていってもかれらのあたたかい心のこもったもてなしに胸を打たれ、その時に私が決意したことは、私の留学が終り、鎌倉に帰ったならば、今度は私が、そのあたたかい行為に対して、お礼をすべきであるという考えのもとに、「鎌倉国際親善ガイド協会」という奉仕グループをつくりました。

そして私の英語教室の「親善ガイド育成講座」で学ぶ生徒と、当時の関東学院大学E.S.S.のメンバーにも呼びかけて、「フリーガイド・サービス」の活動を行ってまいりました。土曜日の午後、あるいは日曜日の午前・午後をこの活動にあてて、鎌倉を訪れる外国人に対して鎌倉の名所、史跡等のガイドを行いました。とかく一般的なガイドでは、その町の表面的な所のみを案内することが多いのですが私は「Hidden Beauty of Kamakura」といって、「鎌倉のかくれた美」を理解してもらえるように、そうした社寺等のガイドにも積極的な足を運んだものでした。又、現在も私はそうしたコースに重点を置いてガイドをしております。

一九六九年には、私の英語教室から参加希望者で結成した「第一回鎌倉親善文化使節団」を夏の二カ月間アメリカへ派遣いたしました。私もその使節団のリーダーとして同行いたしました。これは三つの目的をもって、貴重は二カ月間を最大限に活用してまいりました。

第一の目的はミズリー州、スプリングフィールドという町にあるドルリー大学で、五週間の集中講座に出席するという、短期留学的な要素をもったセミナーで、アメリカの歴史、アメリカの政治、アメリカの文学について、その大学で受講する学生と、全く同等のクラスで、全員授業に出席いたしました。同行した日本の大学生達は、アメリカの大学での講義が、実際にどのようなものであったかを学びとったものと思います。

第二の目的はアメリカ大陸を、バスで横断する際に訪れる大・中都市、そして小さな町で、私達の町「古都かまくら」の紹介をするということ、日本文化の一面をデモンストレーションを行うことに

よって紹介するという行事を、催してまいりました。私のモットーとする「Cultural Understanding Leads to Peace」に基づいて世界のどの国に於いても、文化的背景が異っていても、それを国民同士が理解し合うことが、平和への根源であるという考え方から、この種の行事を行い、「民間外交官」あるいは、「親善大使」としての役割を果たしてまいりました。

そして第三の目的は、一人一家庭での二週間にわたるHomestayで、家族の一員として「生活体験」を行い、アメリカ人の家庭での生活様式などについて学ぶという経験もいたしました。翌年の一九七〇年には、第二回目、七一年には、第三回の「鎌倉親善文化使節団」を結成し、同じ目的をもって訪米し、親善活動を遂行してまいりました。鎌倉の特殊性を活かしてこの使節団の訪米においては、メンバーの英語研修はいうまでもなく、彼等と英語を用いることによつて接し、英語を用いることによつての文化的事項の紹介は、アメリカ各地で大きな成果をあげることができたものと信じています。

今年までに第五回の使節団を送りましたが、今後は、ヨーロッパの各国、そして共産圏諸国へも、派遣したいという情熱にもえています。このような親善活動を通して、関東学院の校訓「人になれ、奉仕せよ」この言葉が、私の心の中に生き続けていたことが、ここでも証明できたものとして大へん満足しています。

一九八一年は、Aokian English Academy創立二十周年にあたり英語研究発表会、国際親善交歓会等、種々の記念行事開催の準備に現在多忙な毎日を送っています。そして関東学院のOBの誇りをもつてはりきっている今日この頃です。

英二部三十三年卒

## 教育ということ

### 相吉典子



教師という職業について、いつの間にか十五年にもなっていました。人にものを教えるなど考えてもみなかった私が、ふとした事から、中学・高校の教壇に立つようになって本当にアツという間の歳月である。その

間色々なことがあった。自分自身結婚もし、専任でスタートをし、結婚以後は家庭科が、専門のつもりでいたが、ある学校では高校の男子に保健を教えたりもした。一時は夢を抱いて私塾を開き、各教科の先生達と教育について話合ったりもした。そんな中で、いつも考えることは、教育とは一体、何であろうかということであった。今でも常に自分に問いかけ、しかも解決できない問題、それは教育とは……ということである。教育とは、教え、育てると書くが、教えるとはどういうことか。一体自分には、本当に人に教える資格があるのだろうか。たとえ教科的に教えることが出来たとしても、人を育てることは出来ないのではないか。そんなことをいつも考えつつ、問いつつ、いつの間にか現在に至っている。

最近こんな話を聞いた。スウェーデンでは職業教育が徹底している、いわゆる日本の中学、高校に相当する時代に、子供の適性を判

断し、適した職業へ進ませる準備教育をさせ、その結果、高校を卒業した子供達は自分の興味、適性をよく考え、自分に適すると信ずる職業に就くという。また教師も、それに必要な助言を与え、親もまず子供の適する職業に就かせるために、努力をするという。従って大学へ進んで、いわゆる学問の道を選ぶ者は殆んど例外なく大学教授なり、学者への道を歩むというし、医師や弁護士等を志す者は、ごくわずかなエリートだという。来日して、日本の高校全入の教育や更には短大、大学も全入という傾向にある日本の実状を見たスウェーデンの人達は、ただただ驚きの目をみはるといふ。

何が何でも一流校へと目指す親子。その結果が、塾、予備校が大繁盛し、その反面、一方で、六割以上の生徒が、高校の授業についていけなくなっているといわれ、いわゆる落ちこぼれとなった連中が、わからない、おもしろくない授業に反発して、学校きらいになり転落の道をたどって行く。しかし、世にいわれる不良という子供が、本当に不良だろうか。私もかつて、鞆の中に刃物をひそませて登校したり、一寸した教師の注意に、激しい反抗を示して、こちらが恐怖のどん底に落ちこむショックを受けた事が何度かある。だが不思議にそういう子供達に対して、憎悪や敵意を感じたことはなかった。無論、一時は（特に反抗的態度に出られると）なすすべもなく、理性すら失いがちになった事もあったが、角度をかえて彼等を眺め、接してみると、意外なところ、驚く程の暖かさや優しさがあって、一度心を開くと、かえってまじめな生徒より一層人間くさく、律義な面があることを感じる。彼等こそ、親切な人間だと思ふ事もあった。いわゆるエリート人間より余程正直であり、単純な人間だと思われた。正直だから、自分の感情をむき出しにし、単純だ

からこそ表も裏もなく、ハケ口をさがし、暴れまわる。それが、大人達に不良のレッテルを貼られ、追放の憂き目にあうのではないか。何かそんな気がしてならないのである。

学校という処もわからない。ここ数年、中学入学時の成績と、高校卒業時の成績を比較して、統計をとる作業を続けている学校がある。興味深いことは、中学入学時の時にトップの成績で合格した者が、例外なく高校三年時には劣等生の成績、つまり下から数える方が早い成績に落ちこんでいる。更に面白いことには、入学時の成績優秀者は、ほとんど一流進学塾の生徒であり、そういう生徒に限って、高一の頃から成績に、伸びがなくなり、卒業に近づくにつれて下落してしまつて、お荷物生徒になつてしまつていくという。教師は、生徒を伸びないように教へてしまつていくのではないか。こう考へてくると、ますます教育とは何かがわからなくなつてくる。ただ言えることは、教師とはただ単なる知識の切り売りではすまされないとことだ。「よい学者必ずしもよい教育者ではない」とはよく聞かされた事だが、今更のように、なるほどと実感できる。

教育は片手間では出来ない。自分の全身全霊でぶつかつて行かなくてはならない。たとえどんなに幼くても、小さな者でも、相手は人間だ。人間と人間とのぶつかりあいに、手ぬぎがあつてはならない。建物でも手ぬぎ仕事は、いつかどこかで破綻を生ずる。人間の場合も同じである。しかも生身の人間のひずみは恐ろしい結果を招く。同じような事が、親と子の関係にもいえるのではなからうか。

教育は、学校まかせという親は多い。そして一度ことがおこるとすべては先生、学校の責任にしてしまふ。一体、そんなことでもいいのだろうか。親が親の権利を放棄して、子供が正常に育つ筈がない。

家庭の教育と学校の教育は、厳然と區別されるべきだと私は痛感する。親は親の責任を果たすべきだ。今更いうまでもないが、家庭教育の重要性、家庭教育が生きてこそ、学校教育が成り立つのではないか。教師達が嘆いていうことは、このごろの生徒は挨拶もろくに出来ないということだ。朝、顔を合せても自分の担任でないと思知らぬ顔をする生徒がふえているという。これが父母にもいえるのである。自分の子の受持ちや、教科を持つてゐる先生には、挨拶をするが、一旦担任や担当が変わると知らぬ顔をきめこむ父母が意外といふものである。これでは駄もあつたものではない。その他、例をあげればきりがないことだが、家庭教育が破壊されては、いくら学校で何を教へようと砂上の楼閣に等しいのではないだろうか。

学問が進みすぎて却つて我々は憶病になつていないだろうか。心理学的にどうの、精神的に圧迫感があるの、あるいは反抗期だからと、子供の顔色ばかりオズオズみていて、その結果が大変な過保護に、自らの子を陥し入れていないだろうか。「ならぬことはなりませぬ」で、理屈をこえて、基本的に駄をもつと考へてみなくてはならないのではないだろうか。親が親の責任を果たし、その上で教師とよく連絡をとりあい、何でも話しあえる場が出来てこそ、本当の生きた教育が生まれるのではないだろうか。

教育とは何か。本当のところ、私はまだ答えをつかんでいない。あるいは、私のような者には、一生わからない問題かもしれない。しかしそれでも尚、私はただ目前の生徒に対して、ひたすら自分の全力で、ぶつかつていこうと思う。それしか私には出来ないのだから……。



お店訪問

おじゃまします

## ニシカワ帽子店

西川 ひろ子さん 家45年卒

九月の初め、伊勢佐木町四丁目にあるお店におじゃましました。

ひろ子さんはとても気さくな方で、快くお話をして下さいました。

お店はおじい様の代からで、関東学院大学を卒業されたお父様と御主人と、関内センタービル（2F）、横浜西口五番街にも支店を出されています。

日本では帽子をかぶる習慣が少ないため、当初はベレー帽のかぶり方などで、お客様にアドバイスするのに苦労されたそうです。

アポロキャップからウエディングハットまで、とても多くの帽子を扱っていらつしやいます。特に子ども用の帽子は種類も多く、サイズが豊富とのこと。いろいろなオーダーも承つてくださるそうです。

営業時間は午前九時半から午後八時まで。定休日は毎月十日と二十日です。

根岸線 関内駅より徒歩15分



## OHNO & SON

大野 恵 一さん 英二部39年卒

横浜シルクセンターの一面にある

高級陶器、七宝焼類などの商品を扱っていらつしやるお店におじゃましました。このお店の経営者大野さんは、話上手でとても親しみやすい方で、思い出深い昔話をまじえながらお話しして下さいました。

場所がら、お客様は外人の方が多く、おみやげとしてお求めになるそうです。時には海外発送もなさるとのことです。また、お店は大蔵省面替商の認可を受けていらつしやるそうで8通貨の両替ができるそうです。

お店の商品の中には、大野さんご自身のアイデアにより各地の職人に作らせたものも多く、そのためお忙しくなかなかお店には居られないとのこと。五十四年度卒業記念品のバックホルダーもこのお店のものです。

その他、ギフト用品、引出物類として利用される方が多いとのこと。で、みなさまも御利用なさってみてはいかがでしょう。

営業時間は、九時半から六時半。定休日は商店としてはめずらしく日曜日。ただし、観光船が港に入った時は、日曜日も営業なさるとのことです。

京浜東北線 関内駅より徒歩15分



## 寿々平

鈴木真智子さん（木村）家51年卒

長い坂と階段をやつとのことで登ると、「寿々平」がありました。時間は七時すぎ。空腹でインタビューするよりも、お寿司の方に目が行ってしまふ所をグツと我慢して、お伺いしました。

御主人、お義父様、お義兄様のお手伝いをしている真智子さんは、以前は家政科の副手もしていらしたので、現在とても役に立っているようです。運動会の為おいなりさんを千三百個も作って、手がしわしわにふやけてしまった話や、宴会の時の洗い物が、家庭の一年分もあるのではないかと思われる程で、洗剤負けしてしまった話を聞き、お寿司屋さんに密かな憧れを持っていた我々編集委員は、ちょっと考えが甘かったようです。だって、お寿司をちよくちよくつまめていいでしょ。でも、真智子さんがつまむのは、かんびょうに、海苔くらい。お魚は嫌いなんですって。うまくできていますね。「寿々平」は、マポリシーハイツ等の団地を手びろく手がけています。

営業時間 十時三十分から十時まで。定休日なし。

インタビューの後は、待望のお寿司を頂いて、そのおいしかった事は言うまでもありません。

京浜急行線 浦賀駅より徒歩15分



## Chick

知久幸子さん（中村）英46年卒

鎌倉の小町通りの小町プラザ一階にある、宝石店。Chickは、フランス語のようなしゃれな名ですが、実は、名字からとったもの。お店の名もすてきななら、マダムの幸子さんもモダンで、現代的なセンスのある方でした。

お客様はオーダーメイドされる方が多く、デザインは御主人とお二人でされ、後はそれを的確に形にできる専属の職人さんに任せています。又、古い宝石を持って来て、それを生かして作り変える、いわばリフォームをしてくれるのがこのお店の良いところ。お二人のデザインで石がまったく別の形の新しい命を吹き込まれ、美しく生き変えるのです。指輪があんまり派手でできなくなったら、帯留にしてみたり、飽きてしまったペンダントの形を変えて楽しんでみてはいかがでしょう。



幸子さんは、スリランカあたりから、ルビーやサファイア、キヤッツアイなどの原石を持つてくる方と、英語で取り引きされることもあるとか。今でもふるに英語を生かしていらつしやるようです。

営業時間 十時三十分から七時。  
定休日・月曜です。一度いらしてみ  
ては？

横須賀線 鎌倉駅より徒歩5分

# 展 望



このインタビューのコーナーは、好評のうちに三回目を迎えます。今回は、退職された先生方、あるいは、再び短大にもどられご活躍されている先生にもご登場していただきました。

質問 1 短大在学中の一番の思い出は何ですか。

質問 2 趣味は何ですか。

質問 3 学生時代熱中していらしたことは何ですか。

質問 4 もし二日後に大地震がくるとわかったら何をしますか。

質問 5 近況をお知らせ下さい。

元国文科教授 糸川光樹



1 天城山荘でのリトリートの朝の体操が思い出されます。山と雲と、あのすがすがしさが好きでした。ないてい下田先生と背中合わせに組んで「ぎっこんばつたん」をやりました。

2 いろいろとかじりましたが、結局手の中に残ったのは、小学校の頃からのハーモニカ一本だけです。

3 詩を作ることでした。

4 庭に穴を掘る。

5 関東学院からフェリス女学院に移ったのが一九七三年の春でしたが、以来ずっと同じところで、相変わらず古事記や万葉集を講じています。「上代日本の文学と時間」という著書の、書名と目次だけはもう出来あがっていますので、あとは内容を満たせばいいのですが、それにはまだ十年はかかるでしょう。関東学院アパートを出て後、また一、二回引越して、今は鎌倉の稲村ガ崎に住んでいます。私は以前から北杜夫氏に（顔が）よく似ていると言われましたが、北杜夫氏が齢を重ねられ、白髪が目立つようにならなくなった現在でも、やはりそっくりだと言われています。新田義貞の古戦場のあたりでマンボウを釣っている北杜夫氏を見かけたら、どうぞ声をかけてください。それは私です。



元家政科教授 桧垣好子



1 天城山荘におけるリトリートの思い出が

やはり一番ですね。佐藤三郎先生方と一緒にテーマ別の分団協議会での話し合い。これは今のアドバイザー別の懇談ですね。それとその頃はまだ大学の専任でいらした村上先生も交えてのゲーム。曲あてゲーム。なんか楽しかったですね。また、退職してからは『家政科の歴史』について講演もいたしました。

2 短歌です。毎日夜になって、まわりも心も静かになってからまとめ始め、毎月添削に十首から二十首程出しています。そしていつかは、一冊にまとめられたら…と思っています。

3 勉強一途だったみたいです。やり出すときちんとトコトンまでやらないと気がすまない性格なのでできりがなく、辞書もわからない時にすぐひけるようにいつも持っていました。それと百人一首もよくや

りました。これが後になって短歌へと、つながったのでしようね。

4 避難の準備を考えます。

家が教会と幼児園をやっていて、日曜日の礼拝の時に、時々オルガンを弾いたり、幼児園の母の会のコーラスの伴奏をたまにしたりしています。

あとは、昔の卒業生に励まされて、もっぱら長生きの研究に努め、趣味の生活にあけています。

老いたれど短歌の世界わがもてば

この幸いに日々の明るし

英文科非常勤講師 ウィリアム・エリオット



1 下田先生や小玉先生などと、いっしょに学生と北海道旅行へ行ったのが楽しい思い出ですね。一番楽しかったのは、柳生さんといっしょにシエックスピアに行っていて、いつも学生をしかっていたのが良かったね。「なにを言ってる。バツキヤロ

ー！」ときたない言葉を言ってるね。冗談ですけどね。

2 詩を書いているけどね。だいたい頭の中

でもいつも考えているんですよ。好きな詩人と言えば外人ではWallace Stevens, W.H.Auden, W.B.Yeats などですが、いますよ。日本人と言うとね。谷川俊太郎、白石かずこなどですね。あと、親しい友達とね、暗い室の中に坐ってお酒を飲みます。そして文学、愛、詩の話を哲学的に話すのが好きです。また、日本の上代歌謡に興味を持っています。仏教が日本に

3 勉強。学生時代は真面目すぎたかもしれないですね。信じないでしょうか？（笑い）貧乏学生であまり出かせないで、室に閉じこもって文学、特に詩の勉強をしていました。

4 テントを買って、高い建物のないところで、前の公園で待つかな。するかどうかわからないけどね。（もし地割れがしたらどうしますか？）しかたないと思って切腹するなあ。（笑い）

5 翻訳をしたり、あと関東学院の大学、短

大、YMCAで教えています。

質問1 趣味は何ですか。

質問2 お子さんに対しての将来の希望は何ですか。

質問3 現在の悩みは何ですか。

質問4 学生時代熱中していらしたことは何ですか。

質問5 もし二日後に大地震がくるとわかったら何をしますか。

### 幼児教育科教授 中田 弘 良



1 さて、何でしょうか。咄嗟に出て来る言葉がありません。元来浮気っぽいのか、何にでも手を出す方で、ひまな時には色色なことをして過ごしています。強いて挙げるならばスポーツをすることと、マジックでしょうね。

2 子供は中一と高一の男の子で、二人共運

動好きで現在のところいたって健康です。やはり一生健康で他人の気持ちを理解し、少しでも人の為になる人間になってもらいたいですね。そして男らしくて、やりがいのある仕事を自分で選んで、その道にそれぞれ進んでもらいたいと思っています。

3 悩みといえるかどうかですが、育ち盛りに食糧事情が悪かった為か背丈が伸びず、特に短足であるということですが、最近の短大生も全般に大きくなって来ていますので、そのうちに「先生、どこにいるの。」などといわれるのではないかと心配です。しかし神様が折角さずけて下さった体ですから、この特徴を生かして短足協会の会長にでもなろうかと考えているところです。

4 学生時代は勉学の傍ら、レスリングに熱中していました。ローマ・オリンピックを目指して努力し、候補選手までになりましたがその夢はついに果せませんでした。「ローマは一日にして成らず」ということを身にしみて感じました。

5 ノアの箱船ではなくて飛行船でも作って多勢の人を救ってあげたいと思いますか

これは無理な話ですね。やはり家族のことが心配ですから、最低生活必需品と非常食を沢山準備し、それぞれに大きなリュックサックにつめて待機しています。その様な事態が起らぬよう皆さんで祈りましょう。

### 家政科助教授 渡辺 紀 子



1 取り立てて言えるものはありませんが、暇な時にブラリ美術館に行ったり、音楽を聴いたりすることが好きです。受身的ですが、本物に触れたということでは何か満足感があります。

2 心身共に健康であること。他人に迷惑をかけないこと。自分のやりたいこと、熱中出来ることを自分で見つけ出して欲しい。(現在ピアノ・水泳を特訓中)

3 仕事のこと、子供のこと等、思いわずらうことは色々あります。人間は悩める動物ですから当然ではないでしょうか。

しかし、夜眠れない程深刻に考えこむことは幸にも現在ありません。年と共に、楽天的になって来た様です。

4 学部の時、スキー合宿に参加したくてワシターフオーゲルの同好会を有志で結成しました。元々体力に自信がありませんでしたが、クラブ昇格の為活動し色々経験しました。重いザツクにテントと寝袋を入れ、雪の上で何度か寝たこともありです。青春若さです。

5 学生時代校友会・課外活動にと活発に参加していました。

新潟地震の経験もあり、研究室の薬品が落ちない様に固定する。

自宅では熱源が止まっても困らない様に食糧と、ポリタンクに水の確保をする。特に外国などに逃避しようとは思いません。



## 国文科講師 岩佐 壮 四郎



1 学生時代に熱烈なる演劇青年であったわけではないけれど、周りの影響などもあってよく見たり、演じる方にも興味があつたり、シナリオなども書いたことがありました。以前は一カ月に一回位は観ていました。ごく最近観たのはですね。転形劇場の「裸足のフーガ」です。状況劇場の「鉛の心臓」もみたいと思つていきます。

また、釣も少々します。

2 五才の男の子が一人います。自分で物事を考え行なっていくという力をつけていくことは大事だから、そのようにさせていくのは父親としての役目だと思うけれど、しかしいやしい人間にはなつてほしくない。かと言って、こうさせたいという方針は特にないですね。とにかく、あまり勝手でも困るが、自分の人生だから自分のやりたいようにいけばいいんじゃないですかね。

3 特にないですね。

4 田舎から出てきて、大学自体がすごくきらきら輝いて見ええましたね。特に女子学生達が眩しく思えました。そうですね。

5 一つの事に熱中していたという事は特にありませんが、その時代、時期、年齢、そういうものに熱中していたと思います。

5 我々は、地震を怖がっているけれど、それをどこかで楽しんでいっているようなところもあるんじゃないですかね。あるいは、地震が来るのを心待ちにしているような……。地震が来て、東京がペンペン草だらけになって減ってしまうようなことをね。だから地震のことを騒ぐ、というようなところがあるんじゃないかな。と、いつて僕が諦め切っているわけでも、達観しているわけでもないのですが……。まあ、でも地震が来るとしたら、まず家族を田舎に返し、自分も安全な所へ移りますね。こういう機会に冷静に考えてみます。

# こんにちは



## 国文科

※ 国文科は卒業生の皆さんからのご希望もあり、国文科長である岡松先生に特にお願ひして書いていただきました。※

国文科らしい特徴と言えば、どういふところになるか考えてみた。しかし、なかなか思いつかない。入学希望の高校生に学内の施設を見せる機会があつても、国文科の場合には演習室の図書以外にはないのだから困つてしまう。英文科にはラボがあり、幼児教育科にはミュージック・ラボがある。家政科には実験室や調理関係の施設がある。しかしそういうものは国文科には何もない。

それでも、私はひそかに自慢していることがある。それは国文科の自由な雰囲気である。演習室の本棚の横に並んだ机で、学生たちが弁当をひろげたり、パンを食べたり、牛乳を飲んだりしている。普通には、本をひろげる場所では飲食雑談は禁じられる。図書館などは当然そうでなくてはならない。しかし、演習室では、他人に邪魔にならない限りは雑談もよいことにしている。学校に来て、授業のある教室を転々と移動するだけでは、国文科の勉強にはならないと考へているからである。

パンを食べながらも本の顔を見る。あんな本があるのかと思う。そして、いつの間にか演習室に親しみを持つ。これが私たち教員の考へている狙いである。

だいたい、国文科で学ぶ古典にしても近代文学にしても、直接世の中に出て役立つものではない。そういう点では、同じ文科系であつても、英文科と違つている。なんとなく、もの考へ方や感じ方が自覚的になり、深まってゆくことだけが、国文科の教育かもしれない。

これを折口信夫という人は、感染教育と言つた。いつの間にか、なんとなく、の教育である。問題はこの教育には年数がかかるので短大の二年間では短い。せいせい基礎をつくるだけである。

二年の終り頃になると、国文科らしいタイプが少少できてくる。それを一言で言へば、表面はおだやかだが、気持はしつかりしている。やさしさと自立心が両立している。

そんな学生が本当にいるかなという問いかけもあるかも知れないが、私はいると思つている。思つていると、本当にそういうタイプの人が出現してくるのである。

※先生も書いて下さつているように、国文科と言うのは他科のような皆さんにご紹介できる諸設備がありません。最近ではビデオやコピーを揃へてはいますが、やはり国文科の財産は書籍です。演習室に揃へられている本は卒業生も自由に借り出すことができますし、学生時代の気分を思い出したい方は是非お出かけ下さい。それから国文科としてのもう一つの自慢：それは「平濁」と言う小冊子です。これは国文科設立以来、毎年一冊ずつ発行されています。先生方の論文、在校生の授業における発表論文、そして卒業生の方々から寄せられた近況等々です。卒業生全員にはお送りすることができます。卒業してからもコツコツ勉強されている方投稿されてはいかがですか？

# 家政科



家政科は昭和五十三年二月に室ノ木校地に移ってから四年目を迎えました。一号館が家政科館になっており、まずその構えをご紹介いたしましょう。

一階は大量調理室、ロッカールーム。このロッカールームも家政科では実習が多いので荷物、白衣等の保管にロングサイズのロッカーが各自にふり分けられています。二階は調理実習室が二つ、調理実験室が一つ、三階は理化学実験室が二つ。四階は被服の実験室が一つ、実習室が二つ。又、各々に準備室、研究室があり、五階は大教室、講義室となっており、一般科目以外の受講は全てこの一号館で行なわれています。

家政科も家政専攻、食物栄養専攻、さらに五十四年四月からは食物栄養専攻が食物科学コースと栄養科学コースに分かれ、新しい家政科の歴史をつくり始めています。では、それぞれの専攻、コース別に内容をご紹介いたしましょう。

## 家政専攻課程

六浦校地での実習室等狭いながらも種々思い出はありますが、こちら室ノ木に移ってからの様子をこらん下さい。

被服構成の実習室は二つ、とても広くなり、準備室、試着室も新しくでき、仮縫い、補正、計測等におおいに活用しています。授業の方は被服構成実習Ⅰでは前期に女物単衣長着(浴衣)、後期には胴部原型からブラウス、スカート原型からスカートを、運針やミシン

でファーイ言ながら制作しています。実習Ⅱではウール長着、袷羽織、実習Ⅲでワンピース、スーツを作り最後の授業で各々着用して写真を撮るのですが、その時の学生は本当に満足そうな顔をしています。

被服科学実験。この実験室は木造平屋から大変身しました。授業もⅠ・Ⅱに分かれ二年生も選択必須として行なわれています。被服科学という名から敬遠されがちですが、授業に入ると洗淨実験、しみ抜き、染色等身近なテーマが主で思うよりスムーズに受けとめているようです。実験Ⅱでは一つのテーマをじっくりと行ない、後期になると各グループごとテーマを決め実験計画をたて、予想外の実験結果に悩んだり喜んだり。白衣姿も板につき積極的な姿勢で各テーマに取り組んでいます。

その他の授業では、家政学の本質を追求する家政学概論。家庭生活の基本を考える家庭経営。衣生活に対する理解と正しい消費者となるための知識を得る衣科学、被服整理学。衣服を制作する上でその土台となる被服構成学。服飾関係では手芸、デザインの実習。食生活に関する食品学、調理実習。また法律的な面からみた結婚や遺産相続等を学ぶ家族関係の授業では、身近な内容だけに具体例をあげての授業に身もぐんと入ります。

## 食物栄養専攻課程

五十四年度から、食物栄養専攻は食物科学コースと栄養科学コースの二つのコースに分けられました。

両コース共に種々の特色を持った個性的なコースで、健康な食生活を考える、という根本的な目標に向かった姿勢をもっています。食物科学コース



五十四年度に新設されたこのコースは新鮮そのもの。校舎、学生と共にピカピカに光っています。食物というだけあって、食べるのが大好きで食品、料理に対する関心が人一倍の学生が多いようです。授業は栄養学、食品学、家政一般と幅広く、実習、実験の多いこともこのコースの特色といえるでしょう。それでは、その中でも特徴のあるいくつかの授業を紹介いたしましょう。

まず食べ物の味、食品の調理上の性質など日常みられる現象を調べる調理学実験。そして調理実習は一、二年でⅠからⅢまであり、基礎となる包丁さばきから始まり、和洋中と専門的調理まで身につく中身の濃い内容が毎週行なわれています。食品加工実習では、ジャムやヨーグルト、カルピスなどを作り、ビン詰めや罐詰めにし、貯蔵に至るまでを実際に行ない、食品加工貯蔵の授業で学んだことを、じかに身につけることができます。

またこのコースの特徴の一つに二年生の料理講習会があります。外より講師の先生をお招きしてお菓子作りをします。実際プロとして活躍されている先生からのご指導は、いつもの調理実習とはまたひと味違った雰囲気を持ち、楽しい中にも充実したひと時をもつことができます。それからもう一つ一年生の施設見学。昨年は、「味の素工場」への見学。これら実際に見学して、学生一人一人多くの収穫を得ることができたことは言うまでもありません。

#### 栄養科学コース

栄養士養成のこのコースも、早いもので一年生はもう十三期生となりました。六浦校地での想い出は数えきれない程ありますが、こちらへ移ってから、教室、実習室等のすばらしい設備。さらに栄養士めざしてがんばっている学生達。その様子ををご紹介します。

まず第一に、めざましい進歩をとげたと言えるのが大量調理室です。六浦校地でのあのプレハブ校舎では、夏暑く、冬寒く、そして昼間でも陽のあたらないという最悪の状況での実習でしたが、今では最新の設備がそろい、充分な条件のもとでなされています。その他調理室も大調理室、中調理室と二つに増え、二年間にわたってフルに活用されています。やはり今でも食べることの好きな学生にとって調理実習は一つの楽しみようです。

実験室は二つ。その他に動物飼育室、エーテル室、天秤室、精密機械室と三階のフロアーすべてが実験関係のものとなりました。この実験室では、食品に含まれる栄養素の定量実験や、細菌検査、食品添加物、水質検査にいたるまで種々の実験を行なっています。そしてそのいずれも、日頃私達が実際に食べたり使用したりしているものをサンプルとして用いるため、学生達には興味深く、真剣に取り組んでいます。

また栄養士課程の特色ともいえる授業は、人体での栄養素の働きを学ぶ栄養生理・生化学をはじめとして、食事療法を必要とする病態栄養学の実験実習。それぞれの人にあつた食生活を考える栄養指導などがあります。そして最大の関門となる四週間の学外実習は、病院、事業所、小学校、保健所と授業では学ぶことのできないものをたくさん吸収し、栄養士への自信を深めていきます。

富士山と蕎麦の舞う姿を窓の外に眺めながら家政科それぞれにがんばっています。卒業生の皆様、お暇な折どうぞおたずね下さい。

※「こんにちわ」の題字は、林学長にお願いして書いていただきました。

## 同期会・クラス会報告

### 〈定例クラス会〉

二年に一度は必ず開くことになっているクラス会が、今回は、昭和五十四年六月九日大仏次郎記念館に於いて開催されました。当日は、松垣先生、鳥越先生、上市先生のご出席をいただきまして、卒業生十一名の出席者と共に、港の見える丘公園内に建てられまして静かな記念館の一室で、なつかしく語り合うことができました。外は好天気にも恵まれ、部屋の中も汗ばむほどで、新緑も一層濃い庭園を眺めながら、久し振りに心から語りあえる古き友と過ごす数時間は夢のようでした。家庭に、職場にと、それぞれの近況報告やら趣味、勉学にと、皆様のご活躍には目をみはるような話題に驚かされました。

松垣先生は、ご趣味で短歌をたしなまれていらつしやるとのことで、短大の校舎の落成の折、「生き甲斐を この学園に注ぎきて 今の新装夢のこちらず」と歌われた由、先生がご感動なさいましたその日のお歌を改めてご披露下さいました。やがて、二本が出版され

るのではないかしら……と楽しみです。鳥越先生は、現役を退かれたとは考えられないお美しさと、その若さ共々、女性の知性が如何に大切かを痛感させられました。上市先生より、母校の発展の姿を写真とお話により詳しく聞かせていただきましてとても嬉しく存じました。

もうお子様も、母校にお世話になつていらつしやる方もあり、歳の流れの早さに今更ながら驚いている次第です。

皆様一層のご活躍と、母校の発展をお祈りして、本心に心残りではございましたが、次会の再会を約して敬会いたしました。



家33年卒 渡辺節子記

### 〈同期会を開く〉



十一月の陽気にしては穏やかな日和の元で十数年振りの同期会が開かれました。(昭和五十四年十一月十一日横浜駅西口の加登家にて)。会を開くに当って皆様方のご消息を知るのに大変苦労いたしました。が、浅倉様方のお力に依りまして殆ど全員の方のご住所が分り、新名簿も作成する事ができました。教務主任だった上市先生を囲み出席者十五名、お顔を合せた当初は余りの変身振りにお互い誰だったか分らず、当惑する場面もありました。が、三十分も過ぎますと二十数年前の学生時代に戻り、時の過ぎるのも忘れ歓談は尽きませんでした。皆様ご立派になられ、お子様達の進学の事、就職の事等々嬉しい苦

勞話に始まり、もう十年もしたら孫の事、更に十年もしたらどのような老人になるのかしら……いい老人になりましょうと苦笑しました。また上市先生より短大の様々な変革をお話いただき、私共の時代の校舎も今は無く、あの音声学でユニークな授業をなさって下さった光畑先生は既に「他界なされた由、心からご冥福をお祈りいたしました。昔の面影の消え失せていく一抹の淋しさの一面、現在の女子短大のご繁栄を嬉しく思わざるを得ませんでした。話し合いはつきぬまま二年後にお会いする事を楽しみに会は終わりました。

英29年卒 加木冷子記（小島）

小賀勝子記（長谷川）

小佐野順子記（鰐川）



### 初のクラス会



全国各地に散らばっているクラスメートの名簿作成から始まって今年六月初旬、横浜西口の桃林にて二十数年ぶりにクラス会を開きました。会には松垣、上市の両先生もご出席下さり、楽しくなごやかな会を持つことができました。卒業以来初めての顔、顔々が懐しく時のたつのも忘れた一日でした。遠く長崎からの出席者もいて、改めてクラス会の意義深さを知らされました。会場では二十年前と現在とが往き交い、恰もタイムトンネルの中にあるようでした。上市先生より現在の女子短大のお話を伺い、素晴らしい発展に大変うれしく感激いたしました。この次には、立派になった母校を見学させていただき、そこで会

を開くこととして、今回は名残り惜しい中でお聞きといたしました。なお、今回は大河原、鳥越、井口の各先生がご都合悪くお会いできず残念でした。終りに、名簿作成にあたり、上市先生には大変お世話になり深謝申し上げます。

家34年卒 大川美津子記（綿貫）

### 女専英一クラス会



前日まで降り続いていた雨も上がり、秋晴れの十月二十六日、横浜三越八階の瑠璃野に於いて、安藤寿々代先生をお迎えして、出席者十四名、芦屋から安沢みねさんが今回も御多忙の中を御出下さいました。

安藤先生に、久し振りにお目にかかる方も  
 おりますので、自己紹介をまじえて学生時代の  
 の思い出や近況の事、お子様の縁談の事など  
 お話はつきず、特に安藤先生は相変らず若々  
 しくお元氣なのは驚くばかりでして、私達  
 中年の真只中で、身体の具合が悪い事をぐち  
 をこぼしてましたら、逆に健康法を教えて頂  
 いたりして、あらためて先生に敬服してしま  
 いました。

御都合で、上市先生に御出席いただけませ  
 んで残念でしたが、次回の御出席を期待し、  
 来年の幹事を小山郁子さんと徐多恵さんが、  
 心よく引き受けて下さり、名残りはつきませ  
 んが、又来年を楽しみに散会いたしました。



女専英24年卒 竹村久子記  
 篠本和子記  
 河野朝子記(北川)

### 新装なった母校を訪ねて

十月十六日(木)卒業以来二十数年ぶりに  
 母校を訪れるクラス有志の会を計画しました。  
 参加者八名程のささやかな会になりましたが、  
 第一会場、八景駅前の真鶴会館で海を眺めな  
 がら昼食をすませ、すっかり風景の変わってし  
 まった海べりを歩き、ハンソン山跡地に新築  
 成った校舎を訪れました。思い出の中にあつ  
 た旧短大の板ばり校舎とのあまりの違いに皆  
 びつくりいたしました。英文科、国文科、家政  
 科、幼児教育科等、総べて最新の設備が完備  
 しており、眼をみはる思いで見学させていた  
 だきました。昔のイメージで母校を評価して  
 いた私達も、時代の流れと共にすっかり設備、  
 内容共に充実してきた現在の短大の姿を考え  
 を改めなければならぬと、参加者一同話し  
 合いました。午後からのほんの短時間でした  
 が事務長の上市先生に案内していただき、懐  
 しく楽しいひとときを過ごしました。毎週木  
 曜日の午後は受験生のための進学相談および  
 施設案内の日に当たっておるとのこと、こ  
 の日は授業の様子も見学させていただきました。  
 前もって上市先生に連絡しておかれると良い  
 と思います。また、食堂もこの十月よりでき

まして、美味しいクレープやコーヒー等も楽  
 しめます。古い卒業生の皆様も是非一度、母  
 校訪問のクラス会を計画なさるようにおすす  
 めしたく思い、ペンを取りました。

家34年卒 辰沼滋子記(中沢)

Holy streamers hang  
 from the Kaya;  
 800 hundred years-old,  
 it casts a new shadow  
 every day.  
 W<sup>m</sup> I. Elliott

\*金沢文庫・瀬戸神社にてエリオット先生が書かれた詩です。

## 母校ニュース

### 創立30周年記念式典

昭和25年学制改革により、関東学院大学短期学部設立より数え、昭和55年が30年目に当り、その記念事業として記念講演会の開催、校訓碑建立、体育祭・短大祭を学校、校友会等の共催で行なわれた。又、名誉教授規程の制定、望まれていた短期大学校歌の制定、締め括りとして創立30周年記念式典が、11月26日(水)午後3時より「ザ・ホテル・ヨコハマ」にて学院関係者及び短期大学教職員、後援会役員、香葉会役員等約190名の出席者で盛大に行なわれた。その中で名誉教授規程制定により選ばれた、相川高秋・桧垣好子・大城富士男各先生方の称号授与が行なわれ、また短大に永年に渡り勤務された28名の教職員の方々が永年勤続者表彰を受けられた。後援会功労者4名の方の表彰もあり、式典に引き続き開催された祝賀会も盛会裏に終了した。

なお、創立30周年記念誌、創立30周年記念論文集が出版されました。

### 学生食堂設置される

数年来要望の強かった学生食堂が、4号館(30周年記念館・昭和55年9月竣工)の1階フロアーに出来上り、10月1日より営業を開始いたしました。サラダ・スパゲティー・ピラフ・ラーメン・クレープ・サンドウィッチ・カレーライス・ピザ等メニューも豊富に取りそろえ、今後は定食も行なう予定であるとのことで、連日学生、教職員でいっぱい盛況です。なお、希望があれば会食・特別メニューも受けるとのことですので、卒業生の方々のクラス会などにもご利用下さい。申し込み、お問い合わせは短大庶務課までお尋ね下さい。

### 新校地施設計画

金沢区釜利谷町の約2112、187㎡を取得し大学、短大の総合グラウンドを建設し教育施設の整備拡充を図り、また市街地における広域避難場所としての機能を持たせ、防災都市建設の一端を担うものとして計画し、その起工式が12月19日午後2時より行なわれ、計画のスタートがきられた。

### 家政科 山口教授・渡辺助教授

#### 学会賞受賞

家政科長の山口和子教授は昨秋、「食生活の形成に関する研究」で日本栄養改善学会賞を授与されました。又、11月には昭和55年度神奈川県保健衛生の功労者として神奈川県知事より表彰されました。

同じく家政科の渡辺紀子助教授は10月に、「洗浄用水としての海水利用」に関する論文で日本家政学会奨励賞を受賞されました。



# 関東学院女子短期大学校歌

作詞・作曲 創立30周年記念校歌作成委員会

おらかに

1. はるかめなるおおうみこのえてきー  
2. かもがめまけうるおひらかたのぞへみにてオー  
3. かみやまけるおひらかたのぞへみにてオー

よりのきききはここにくしかげれり  
のきゆプリははこあいこままにくぞしかひられきりぬ

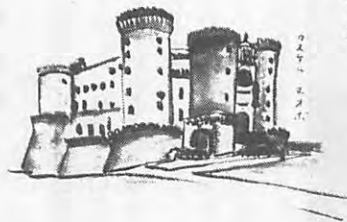
しんこうひかたくともしきてきよならましのうびれ  
ゆうじょうのをはかねにつあふしぎれててきひたるらすのなまつしなど  
よをきよひにによかほにみうしをしせせれよととよつき

はまののよつきはまのののちこそ一たあてれ  
しうのひよつきはしうまののひちみかそ一たあてれ

## 関東学院女子短期大学校歌

短期大学創立30周年記念事業のひとつとして関東学院女子短期大学校歌が作成されました。作成にあたり創立30周年記念校歌作成委員会が設立され、宗教関係・国文科・幼児教育科の諸先生方で作詩・作曲が行なわれました。

今までは卒業式などで歌われるのは学院歌である「関東学院歌」であり、カレッジソングでした。今回の「香葉」の座談会でもお話ができましたように校歌がないというのは大変淋しいことでしたが、これからは式典はもちろんのこと、同窓生の集いなどにも歌われていくものと思います。



# 五十五年度

## 総会報告

香葉会会員が年に一回一堂に会する集いが、六月二十九日に横浜駅西口のホテルリッチ九階ホールで開かれました。合憎の雨と初めての場所という事もあってか、出席は五十余名と例年より少なかったのですが、初めて来て下さった方も多く、楽しい会でした。相吉副会長の総司会で佐藤姉が礼拝を進行、村上助教が美しい奏樂を聞かせて下さいました。次いで江口幹事長から事業報告、会計報告があり予算も皆様の承認を戴きました。今回のメイン・イベントは上田敏晶教授(心理学)の講演で「愛すること・愛されること」という私達に最も身近な題で大変感銘深い、反省もさせられるお話を約一時間にわたって伺いました。その後、十人位づつの丸テーブルを囲んでご馳走を戴きながら、各テーブルから自己紹介や近況報告があり、和氣藹々の楽しい一時をもちました。会が終わってから、突然グラグラとくる地震にキヤットという一幕もありましたが、先ずは無事に三々五々、二次会へと繰り出すグループもあり、来年の再会を

約して散会しました。

(古城記)

### 第一部

礼拝

前奏

司会 佐藤 恭子  
奏樂 村上 顕

讃美歌

90

聖書

祈禱

讚美歌 333

黙禱

後奏

総会

司会 江口 和子

会計報告

事業報告

経過報告

新年度予算案

その他

### 第二部

あいさつ

講演

講師 上田 敏晶

「愛すること・愛されること」

## 合同同窓会報告

五十五年の合同同窓会総会は九月十二日に開かれ香葉会から、五名出席しました。今年重要な課題は規約の改正でしたが、「香葉九号」でご報告したように、意見の一致をみないまま総会を迎えてしまいましたので、継続審議が承認されました。燦葉会と六葉会に会長以下役員交替がありました。決算の承認と予算の審議がありました。合同同窓会として何の事業も行なっていないのに基本金を徴収する事に対する疑問と現在迄積立てられた基本金約一千万円を活用すべきではないかという意見が出され討議の結果、五十六年度に限り活動費として二〇〇〇円のみを徴収するという事に決定しました。基本金の活用については幹事会で具体的な案を検討することになりました。尚、規約は今後、毎月一回幹事会で審議することになりました。今後どの方向に発展するか判りませんが、幹事一同の協力体制が出来てきて、なごやかな空気になるてきたことは嬉しいことです。香葉も評議員会の意向を反映させながら一層、努力していきたいと思えます。

(古城記)

# 関東学院女子短期大学 香 葉 会

昭和 54 年 度 決 算				55 年 度 予 算	
収 入 の 部	予 算	決 算	増 減	収 入 の 部	
会 費@4,000×677	2,708,000	2,708,000	0	会 費@4,000×684	2,736,000
合同援助金@1,000×677	677,000	677,000	0	合同援助金@1,000×684	684,000
貸 助 金 (202名)	50,000	243,855	193,855	貸 助 金	100,000
委 託 販 売 手 数 料	500,000	1,111,934	611,934	委 託 販 売 手 数 料	770,000
寄 附 金		1,500	1,500	預 金 利 息	15,000
預 金 利 息	15,000	47,119	32,119	前 年 度 繰 越 金	1,756,711
前 年 度 繰 越 金	2,374,267	2,374,267	0		
合 計	6,324,267	7,163,675	839,408	合 計	6,061,711
支 出 の 部	予 算	決 算	増 減	支 出 の 部	
事 業 費	1,200,000	1,176,206	23,794	事 業 費	1,100,000
総 会 費	900,000	328,040	571,960	総 会 費	450,000
会 合 費	500,000	405,001	94,999	会 合 費	500,000
通 信 費	100,000	44,062	55,938	通 信 費	100,000
交 通 費	70,000	88,000	△ 18,000	交 通 費	100,000
事 務 ・ 印 刷 費	300,000	84,305	215,695	用 品 費	500,000
事 務 委 託 費	400,000	400,000	0	事 務 ・ 印 刷 費	250,000
新 入 会 員 歓 迎 費	500,000	1,196,000	△ 696,000	事 務 委 託 費	400,000
雑 費	374,167	5,250	368,917	新 入 会 員 歓 迎 費	1,000,000
子 備 費	300,000	0	300,000	合 同 分 担 金@1,300×684	889,200
合 同 分 担 金@1,300×677	880,100	880,100	0	基 本 金 繰 出	300,000
基 本 金 繰 出	300,000	300,000	0	名 簿 発 行 準 備 金	300,000
香 葉 発 行 準 備 金	500,000	500,000	0	予 備 費	150,000
次 年 度 繰 越 金		1,756,711	△ 1,756,711	雑 費	22,511
合 計	6,324,267	7,163,675	△ 839,408	合 計	6,061,711

## 幹 事 長、副 幹 事 長 交 替 の お 知 ら せ

五十二年から四年に亘り幹事長を務めて下さった江口和子さんが十一月にご結婚され、坂本さんになられました。心からおよろこび申し上げます。現在、川崎の幼稚園に勤務しておられ、当分共働きの上、東京にお住いですので夜の出席が出来にくいとのことと辞任の申し出がありました。又江口さんと同時に副幹事長を務めて下さった中石みどりさんは学内のお仕事が忙しくなられるとのことと辞任を希望されました。お二人は香葉会の雑務、会誌の編集等で活躍して下さい会として本当にお世話になりました。皆様と共に心から御礼申し上げます。尚、お二人共評議員として今後も会の運営に協力して下さいます。

去る十二月八日の評議員会でお二人の辞任が承認され新しく次の方が選出されました。

幹事長 田中啓子さん(家五十一年度卒)

短大体育館勤務

副幹事長 辻其由美さん(国五十一年度卒)

短大図書館勤務

お二人は学生時代、学友会の会長副会長の名コンビで活発明朗なお嬢さん達です。会の方に最適な人材を与えられたと感謝しています。

乞いご期待!

(古城記)



# 賛助金をご寄付

## 下さった方への

### お礼とお願ひ

今年も後記の方々から総額「三十四万一千八百五十円」をお送り頂き、厚く御礼申し上げます。諸物価の値上げにより、年年「香葉」の発行がむずかしくなつてまいりましたが、卒業生唯一の雑誌をなくしたくないと、編集員一同がんばつておりますので、今後共賛助金の御協力をよろしくお願い致します。

#### 五十五年度賛助金寄付者（敬称略）

金谷治子 小牧武彦 田嶋明美 中田美恵子  
 新戸昭江 片方教子 中江雅子 関野としみ  
 薬袋桂子 布施里佳 浜岡清美 片岡由美子  
 佐藤貴美 樋口幹雄 鈴木洋子 杉山ますみ  
 白井清子 中山和子 中根悦子 市山久美子  
 玉木宮子 田村園子 中川洋子 佐藤薬師子  
 新井清美 門根静子 稲垣愛子 宮沢真喜子

萩原明美 森谷敦子 須田広子 土田由利子  
 石塚靖子 加藤広美 中村智子 山中千代子  
 岩田君江 伊藤陽子 高山政子 宮入由紀子  
 林香代子 京免静子 福島誉子 岩木由紀子  
 岡部孝子 斉田実子 小峰節子 福田しほり  
 福田恭子 土屋幸枝 畑中穎子 実子リーディ  
 佐藤美代 君島瑠美 鈴木清子 落合多喜子  
 細田昌子 野尻節子 伊藤明乃 霜鳥三枝子  
 寺内雅子 長井恭子 藤田功子 大木由紀子  
 武藤和江 横山公子 山本桂子 白石真砂子  
 岸貞子 夕八茜 五十嵐かほる 萩原須江子  
 藤田幸子 羽田高義 小松照代 金子るな子  
 横山良子 鈴木照子 雨宮慶子 錦織マサ子  
 小沢悦子 佐藤晶美 細野清美 杉本ユウ子  
 長島百代 橋本光江 名沢章子 星野美智代  
 勝見修子 井上妙子 今井カヨ 蔵田あけみ  
 下田治子 洲上龍美 戸田珠美 生亀喜久松  
 矢部治子 金子貞子 田辺洋子 村井富士子  
 藤城栄子 大谷昌子 菊地和子 鈴木みどり  
 萩原久子 布川優子 大楨郁子 松本智恵子  
 千田節男 岡庭聖子 北見智恵 實方佳代子  
 鈴木利治 大羽恵美 高井正子 葉若二美子  
 平山幸 田代司 中嶋貴美子 高野橋美佐江  
 鶴見朝子 山崎公代 小島純子 中村あい子  
 柳川礼子 吉田弘子 大村昌子 金子千恵子

堤しづや 松岡梅子 原嶋曜子 永井八千代  
 高橋典子 金谷雅子 井田玲子 五十嵐亮子  
 栗原由美 田平悦子 小沼雄永 鈴木恵美子  
 水木宣子 堀越昌子 清水鈴子 外川富美子  
 矢田宏子 土山典子 高橋秀子 福水由美子  
 岡崎幸恵 松野きよ 石渡嘉子 伊藤志津子  
 井上桂子 住吉桂子 和泉マヤ 三野宮恭子  
 本橋博 阿部幸江 居出祐子 長谷川澄美夫  
 芝文枝 小針章子 西岡那美 長谷川不二恵  
 橋本朝子 篠原繁治 徐多恵子 石垣むつみ  
 辻真由美 田中啓子 佐藤恭子 加賀谷真弓  
 安彦潤子 堀越絹代 塚本令子 鹿島よし子  
 江口和子 相吉典子 辰沼滋子 中石みどり  
 松浦悦子 石渡雅代 中島玉恵 吉田千恵子  
 武井陽子 川越佳子 望月純子 仲戸川淳子  
 志賀ミチ 飯田冨子 山口周子 黒坂紀代子  
 加藤虎之介 大川美津子 遠藤久仁子  
 浅倉美佐子 海老澤さよ子

（以上一九六名）

## 編集後記

香葉会では、この度左のようなバックホルダーを作りました。大変好評ですので会員の皆様にお勧めいたします。地色は赤、葉は緑の七宝焼で、まわりがシルバー色です。市価の半額（千三百円）でお分けしています。

尚、昭和五十五年は、短大創立三十周年を迎えました。その記念事業の一つとして「短大三十年記念誌」（二八〇頁）を出版いたしました。残部は少ないのですが（実費千円）お分けいたしております。右何れかご希望の方は、短期大学庶務課にお申込み下さい。



今回は記念号ということで、ページ数も例年より倍になり、内容も回想とか、座談会、お店訪問など、若干違った企画を取り入れられましたがいかがでしたでしょうか？

編集委員も正規の六名の他に、校正を福地勢津子さん、大場みえさん、青木宏子さん、木村恵子さんに助けていただいで十名の汗と努力の結晶が出来あがりました。

夏休みも暑い中をインタビュウに出かけたり、夜遅くまでページの割り付けや校正をしたり、二時間の座談会を四ページ分にまとめたり、皆よくやってきたと思います。でも、お店訪問の時などは、美しい寶石やボウシにうっとりしたり、卒業生の楽しいお話を聞かせていただいた時は、編集の仕事もなかなかおもしろい物だと思ったりもしました。

このように出来あがってきた「香葉」を見ると、喜びもひとしおですが、なにぶん職員の慣れない仕事ですので、ご満足いただけるものができたかどうかわかりません。これからも「香葉」を盛り立てていく為に、皆様の感想などお聞かせいただければ幸いです。また、是非投稿したい方、御連絡下さい。

では、次号まで一年間さようなら。



堀越 長山  
西沢 小堀  
加藤 金田



# KANTO GAKUIN WOMEN'S JUNIOR COLLEGE



## 後輩へ就職求人を！

本学卒業生の就職については、卒業生の実績が実を結び、毎年卒業予定者の2～3倍に達する求人があり、各科共百パーセントに近い成績をあげています。しかし、地方出身者に関しては、短大卒業生を受け入れる職場が少ないのです。そこで、高校卒業生に比較し、対人応待等に優れ、即、戦力化し易い短大卒業生、皆様の後輩採用を、皆様及び皆様のご主人に是非、ご検討いただきたいのです。

短大生ご採用のお話しがございましたら、下記学生課就職係迄、ご連絡いただきますように、お願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834 Tel (045) 784—1491 内226・258

関東学院女子短期大学学生課就職係

## 香葉 第 10 号

昭和56年5月30日 印刷・発行

関東学院同窓会・香葉会

代表者 古城 房子

横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236

関東学院女子短期大学内

電話《横浜045》784—1491（代表）

関東学院同窓会・香葉会誌